

No. 6

March 2026

HIRAIZUMI GAKU KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi New Studies

Contents

Keynote speech

Ancient Capitals and Temples of Southeast Asia

TOMODA Masahiko

Research Report

Characteristics of Hiraizumi's spatial Composition Based on the Visibility Domain of Muryoko-in

ISONO Aya

Research on Zhejiang Ceramics Excavated from Yanaginogosho-site

Ruifan ZHANG

Contents of the event

Report of the 6th Forum for Hiraizumi Studies

**World Heritage Hiraizumi Preservation and Utilization Promotion Executive Committee
Iwate Prefectural Government and Iwate Prefecture Board of Education**

10 -1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan



令和7年度文化庁芸術振興費補助金
(地域文化財総合活用推進事業)

平泉学
研究年報

第6号

令和8年

世界遺産平泉保存活用推進実行委員会

平泉学 研究年報

第6号

令和8年

世界遺産平泉保存活用推進実行委員会

序

岩手県では、世界遺産に登録された遺産及び周辺の歴史遺産を総合的に調査研究し、その成果を広く公開し活用していくため、研究機関の整備を検討しています。その一環として、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、「平泉文化研究機関整備推進事業」によって、研究者相互の連携、多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでおります。

今年度からスタートした「平泉文化の総合的研究基本計画」（第4期）では、令和11年度までの5カ年計画において5つのテーマを設定し、岩手大学と岩手県が2つのテーマで共同研究を行うほか、岩手県と外部研究機関の研究者との共同研究を計画しております。それらの研究成果については、「平泉学フォーラム」などを通じて、多くの皆様へ研究成果の公開と情報発信に努めているところです。

岩手県及び岩手県教育委員会は平泉文化研究体制整備の観点から、「平泉世界遺産ガイダンスセンター」を研究の拠点として、今後も世界遺産平泉の有する価値への理解を深めるため、発掘調査や平泉文化の情報発信を推進して参りたいと考えております。

今年度刊行する「平泉学研究年報」第6号は、平成12年度に刊行を開始し、主に県と岩手大学の共同研究成果を掲載する「平泉文化研究年報」とともに、県と国外部研究機関の研究者による研究成果をまとめたものとなります。

今後も本年報が平泉文化の研究を進展させる一助となるよう努めて参ります。

最後に、共同研究へのご理解とご協力をいただいた関係機関に深く感謝を申し上げます。

令和8年3月

岩手県教育委員会
教育長 佐藤 一 男
世界遺産平泉保存活用推進実行委員会
委員長 和田 英 子

目 次

I 基調講演	
「東南アジアの古代王都と寺院」	
友田正彦（東京文化財研究所）	1
II 研究報告	
研究報告1 「無量光院の可視領域に基づく平泉空間構成の特徴」	
磯野 綾（千葉工業大学）	22
研究報告2 「柳之御所遺跡出土の中国浙江産磁器に関する研究」	
張 睿帆（寧波大学）	35

第6回平泉学フォーラム実施報告	43

例 言

- 1 本書は世界遺産平泉保存活用推進実行委員会が実施した「第6回平泉学フォーラム」での基調講演及び研究報告を掲載したものである。
- 2 1の事業「第6回平泉学フォーラム」については、岩手県、岩手県教育委員会、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センターと世界遺産平泉保存活用推進実行委員会が連携して実施した。
- 3 本書の編集は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が行った。

基調講演

「東南アジアの古代王都と寺院」

東京文化財研究所 副所長 友 田 正 彦

はじめに

おはようございます。東京文化財研究所の副所長をしております友田正彦と申します。本日はよろしくお願いたします。今日のタイトルは「東南アジアの古代王都と寺院」としました。私が本フォーラムに参加させていただくのは初めてなので、これまで5回でどういう話がされていたのかを簡単に振り返ってみるところから始めたいと思います。基調講演のタイトルは、初回の「平泉」の世界遺産の価値を読み解く」から始まって、第4回が「北・東アジア都市史からみた平泉」、第5回が「中世都市史研究からみた平泉」ということで、特に直近の2回については都市史からみた平泉という部分が共通しています。今回私に与えられたお題は東南アジアということなので、素直にいけば「東南アジア都市史からみた平泉」というタイトルで良いのかもしれませんが、そういうタイトルをつけるのに躊躇したところがあります。主に2つほど理由があり、1つ目は私の能力不足、特に「都市史」ということに関しては、私は建築史を専門としていますが都市の専門家ではありませんので、都市史とタイトルをつけるのは少し厳しいところがあります。そして、「東南アジア都市史」と言ったときに、そもそもそういうものがあるのかという問題があります。東南アジアの都市史として植民地時代以降の都市に関してはいろいろ研究があり、それ以前の都市に関しては各国の地域研究の中では取り上げられているものの、それをひとつに括った東南アジア都市史なるものがそもそもあるのかといえば、学問分野としてはまだ十分に確立していないと思います。さらにもうひとつの難題は、「からみた平泉」という部分です。今日の話を開けばお分かりいただけると思いますが、東南アジアの話は平泉に結びつけるというのはなかなか難しいなと正直思うところです。とはいえ、平泉学の研究会なので必ず平泉関連の話をしてください、と主催者から釘を刺されていますので、最後に少しそういうお話もさせていただきたいと思います。

私は、東京文化財研究所で主に文化遺産に関する国際協力の仕事をしており、主なフィールドは東南アジアと南アジアです。この研究所に勤める前、もう20年ぐらい前になりますが、民間のコンサルタントとして中尊寺の保存管理計画や柳之御所の遺跡整備計画といった計画づくりのお手伝いをさせていただいたことがあり、平泉とはそこからの御縁になります。世界遺産登録には私は直接関わっていないのですが、世界遺産としての価値評価では、平泉は、皆さん御案内のとおり、現世における仏国土、すなわち浄土を表現したものと捉えられています。したがって、そのストーリーに従って、宗教関連施設の寺院や浄土庭園、そして金鶏山も宗教的な意味合いが大きいということで、これも含めて構成資産となっています。最初の段階ではこの他にもいろいろな遺跡が構成資産として提案されていましたが、浄土というストーリーで整理をしたときに外されたという経緯があります。例えば柳之御所遺跡は、奥州藤原氏のいわゆる政治権力拠点、世俗の拠点の遺跡なので全体のストーリーになじまないということで外れてしまった訳ですが、それではやはり平泉の全体像を捉える上では不足であるということで、捲土重来を目指して、皆さんが日々努力をされていると承知しています。そこで、そういう世俗的な要素も含めて、大きな視点から平泉を捉えるときに「都市」というキーワードが出てくるのだと思います。都市性についての議論が必要だということで、このフォーラムにおいても都

市史にお詳しい先生方が比較都市史という観点から招聘されたと理解しています。

私は、今の研究所に来てから17、8年になりますが、その間、専ら東南アジアと南アジアの国々で仕事をしてきました。主な仕事は、建築遺産、考古遺産の保存への協力です。30年ほど前にカンボジアの、後ほど出てきますアンコール遺跡群の中にあるバイヨンという中心寺院の一角にある、本当にお経を入れたかどうか実は分からないのですが、経蔵と呼ばれている建物の修復に関わったのが、私が東南アジアで本格的に保存修復に携わるきっかけでした。修理してから30年ぐらい経ちますが、今もさほど状態は変わっていません。

今日は保存の話ではなく、近代以前の都市、それから寺院がどういった意味合い、どういったコンセプトの下に造られたと考えられるのか、という話をさせていただきます。特に平泉との関係も含め、都市計画、あるいは伽藍計画、そういった設計において宗教思想がどのように反映されているのかを見ていきます。なかなか実証が難しい話もあって、証拠を出せと言われると困ってしまう部分もあるのですが、これまでの研究を踏まえて、私なりに考えているところも交えつつ、お話しできればと思います。

まず初めに、東南アジアにおける都市、何が都市かはこのあと触れますが、都市の始まりについて話します。それから、その先の話の理解の助けとして、古代インドの宇宙観、それから都市の思想について話し、古代のインドが東南アジアの都市や寺院に非常に大きな影響を与えていることについて話したいと思います。3番目に、インドから導入された思想、特に宗教と政治の在り方を背景に東南アジアの都市、あるいは建築がどう展開していったか、特に王権の拠点である王都、ここでは都城という言葉はあえて使わないですが、王都について、カンボジアを中心に話をさせていただきます。カンボジアを中心というの、もちろん私のフィールドということもありますが、ほかの地域に関してはなかなかきれいな形でストーリーを辿りにくいこともあり、一番こういう話題にふさわしいのがカンボジアの王都だということです。それを中心に話して、それ以外については補足的に触れる形になります。「東南アジアにおける」と題したものの、ほとんどカンボジアの話に終始するかもしれないことを最初にお断りしておきます。それから、都市の中に寺院があるわけですが、その寺院を建設するにあたって、宗教思想がどのように計画あるいは構想に反映しているのかを見ていきます。最後に平泉との比較、この部分はちょっと心もとないのですが、その話をしてまとめに代えたいと思います。

1. 東南アジアにおける都市のはじまり

「都市」とは何か

そもそも「都市」とは何か。ゴードン・チャイルドというオーストラリア生まれでイギリスで活躍した考古学者による、古代都市の定義を挙げてみます。少し細か過ぎる気もしますが、10項目ほど挙がっています。古代都市の定義ですので、都市一般の定義とは違うのですが、その中で4つほどピックアップすると、人口の集中、社会の階層化、それから都市は専ら消費の場で特に王族や貴族は生産をしないわけですが、生産と消費が分離しているということ、そして都市を支えるために広域的な交易が存在すること、そういう市場の存在が都市にとって不可欠な要素だということ、この4つの要素は、おそらく近現代の都市にも通じると思います。

これに対して、チャイルドがあげた要件の中には、例えば芸術的表現、それから宗教とは書いていないかもしれませんが、暦、算術、幾何学、天文学が出てきます。神殿などのモニュメントという言葉もあります。この宗教、芸術という部分は果たして都市に不可欠なのか。確かに多くの古代都市が

そういった要素を持つことは事実ですが、全部に対して適用できるかということ、必ずしもそうでもないような気がします。例えば、東南アジアではありませんが、今のパキスタンにモヘンジョダロという遺跡があります。世界遺産にもなっているインダス文明の都市遺跡で、今から4,000年ぐらい前に栄えた場所です。仏塔もありますが、この仏塔はかなり後の時代、紀元後2世紀頃に建てられたと言われていて、都市が一番栄えていた時代に王宮とか神殿があったのか、はっきりとは分かっていないようです。宗教的な要素を備えていなければ都市は成り立たなかったのかという点については、若干留保が必要かと思えます。

東南アジアの都市

東南アジアの話に入ります。東南アジアで一番古い都市は何か。これはもちろん先ほどの都市の定義に関わってきて、遺跡として考古学的に見れば、集落の大規模なものという捉え方になってしまいますが、1つの要素として領域性ということがあります。明確な領域を持った大規模な集落ということで、東南アジアで最初期の都市の例とされるのが、今のミャンマーにあるピューの古代都市群です。世界遺産としてはハリン、ベイトノー、シュリクシェトラという3つの遺跡が構成要素になっており、南北に長いミャンマーを北から南へと流れるエイヤーワディ（イラワジ）川の流域にこれら3つの遺跡があります。

ピューは、中国の文献の中に驃国と書かれているのですが、そういう国が今のミャンマー辺りにあると4世紀代ぐらいの文献に出てくるようです。さらに時代が下ると、驃国についての記録がもう少し出てきます。3つの遺跡の中で一番規模が大きいのがシュリクシェトラです。ちょっと不整形ですが、煉瓦で造った城壁がめぐって、その延長が15kmぐらいありますので、かなり大規模な集落、あるいは都市だということが分かります。城門がたくさんあったことも確認されています。ここではコインが出土しています。コインが出てくるということは、当然そこで交易が行われていたということで、交易拠点としての性格があることは間違いありません。それから、タブレットみたいなものに文字が書かれていて、仏教関係でも石版に仏像が彫られています。これがどこまで古いものなのかについては諸説あって、都市の起源と仏教とを結びつけることはおそらくできないのですが、ある時期から仏教の拠点としても機能していたことがこのような遺物から分かります。

もう少し時代がはっきりしている古代都市としては、オケオという遺跡があります。これは今のベトナムの最南部、メコン川が中国からミャンマー、ラオス、タイ、カンボジアと流れてきて、ベトナムで海に注ぐ、メコンデルタ地帯にある遺跡です。これは、カンボジアの歴史でその起源とされる扶南という国



図1 ピューの古代都市群
(Pyu Ancient Cities世界遺産登録申請書 2013)

が中国の文献に出てきますが、その扶南の港だったと考えられている都市遺跡になります。オケオは、遺物等から判断して、1世紀ぐらいから始まり7世紀頃まで栄えたと考えられます。周りを三重の堀で囲まれた長方形の都市で、この域内だけでなくその周囲に非常に広域的な水路網、人工の運河が造られていたことが分かっています。そして、運河でつながったアンコール・ボレイという遺跡があります。これは今のカンボジアのタケオ州にあり、扶南の都ではないかと言われています。都と外海に面した港湾都市とが水路網で結ばれているということで、かなり広域的な国家の存在が示唆されます。オケオとその周辺からは、ヨーロッパのローマコインなども出てきます。それから、非常に立派な神様の像、ヒンドゥー教のヴィシュヌ神や仏教の観音菩薩の石像もありますし、木造の彫像も出てきています。このように、非常に広域の、海でつながった国際的なネットワークに接続していたことが分かります。とりわけインドとの関わりが強く、そこから様々な文化的な要素、宗教的な要素、あるいは政治の仕組み、そういったものを取り入れたと考えられています。特に4世紀頃からそういう傾向が強まっていき、フランス人の碑文学者ジョルジュ・セデスはこの現象を「インド化=インディアナイゼーション」と名付けました。インド目線ということで批判され、最近はあまりインド化という言葉は使わないのですが、いずれにしても、東南アジアで都市あるいは本格的な国家が成立するにあたって、インドからのコンセプトを取り入れたことについては広く共有されています。

先ほどの扶南と同じぐらいの時期に、これも交易国家ですが、チャンパという国が今のベトナムの中部、南部を拠点に栄えます。

東南アジアの中でも、ベトナムの北側半分ぐらいの範囲は中国と歴史的なつながりが非常に強く、紀元後の11世紀初めにベトナムのいわゆる越と言われる民族が独立国家をつくるまで、2000年ほどにわたり中国の王朝から直接支配を受ける時代が長く続きました。このため、ベトナムの北半分だけは例外になるのですが、それ以外の東南アジアの大半の地域、特に大陸部の東南アジア、今の国でいうとベトナムの南部、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、マレーシアの本土、それからインドネシアのジャワ、スマトラなどの島々、こういった地域はインドの文化的な影響を色濃く受けて国家形成がされたと考えられています。



図2 オケオとアンコール・ボレイの立地 (Jacques 2007に加筆)

2. 古代インドの宇宙観と都市思想

古代インドの宇宙観

次に、いきなり都市から宇宙になってしまっていますが、インドの宇宙観、インドでは宇宙なるものをどう捉えていたか、それが都市の思想にどう関わっていくのかみていきたいと思います。

古代インドの世界モデルでは、世界の真ん中にメール山、仏教だと須弥山になりますが、山があります。この山を中心に世界が同心円状に、平面的に広がるだけでなく、立体的に広がっていて、メール山の下にも世界があるし、上にも世界があり、地下の世界、地上の世界、それから天界を串刺しにするようにつないでいるのがメール山であると捉えています。宇宙軸という言い方をしますが、そういう宇宙の中心軸としてメール山がある。古代インドにはまだヒンドゥー教とか仏教とかとに分かれる前からこういう考え方があって、それがヒンドゥー教、仏教、あるいはジャイナ教、そういった各宗教にも取り入れられたということです。大きな括りとしては、ヒンドゥー教でも仏教でも宇宙観というのはそれほど大きくは変わらないと思います。

ただ、子細に見ていくと違いがあって、例えばヒンドゥー教ではシヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーと3つの神が中心ですが、このブラフマーという神が宇宙をつくったとされていて、このブラフマーの都城がメール山の頂上にあると言われます。それに対して仏教では、須弥山の頂上には帝釈天が住む宮殿があって、帝釈天はヒンドゥー教だとインドラ神にあたりますが、そのさらに上に多層の天上界なるものが存在するとされます。先ほどのブラフマーに相当する梵天が仏教では天上界の守護者になりますが、世界を仕切っているわけではなく、仏教においては梵天も教えを説かれる対象の衆生、信者の一人という位置づけになります。このあたりは、仏教がヒンドゥー教と差別化をする、あるいは仏教として確立していく中で創り出された考え方ということになります。

もう一つ、仏教には三界という世界観があります。4、5世紀頃に世親（サンスクリット語ではヴァスバンドゥ）というお坊さんが、『俱舍論』に書いています。世界は三層に分かれていて、我々が住んでいるのは一番下の欲界という欲にとらわれた世界、その上に欲からは逃れるのだけれども物質が存在する世界=色界というのがあり、そのまた上に物質もなくなって精神だけが残る世界=無色界、という三層に分かれているのが世界である。この三界から解脱する、ここから逃れることを涅槃といい、もう欲も物質も精神もない=無こそが涅槃の境地ということで、この無に到達するのが仏教の究極的な目標だと説かれています。

平泉に関して、では浄土はどこにあるのかという話ですが、この古代インド的な考え方、これは今東南アジアで主流になっている上座部仏教、小乗と言われる世界観ですけれども、その中には浄土という考え方はないのです。浄土というのは大乘仏教とともに広まった考え方で、先ほどのモデルでいうと、天界のさらに上に仏国土、浄土なるものがあって、来世でそこに生まれ変わることによって輪廻転生を脱却できるという思想です。小乗、上座部の側から言わせれば、そういう大乘思想は本来の仏教とは違う、無を目指すのがもともとの釈迦の教えなのだ、ということになります。

都市思想

こういう宇宙観、世界観が、都市のモデルにどう反映していくかですが、古代インドの理想的な都市について記述した思想書というのが複数伝えられています。原本は残っていませんが、筆写されたものが残っており、その中で一番有名なのが『アルタシャーストラ』というもので、紀元前2世紀頃から紀元後2世紀頃にかけて成立したと言われています。その中に、都市の形とか、城壁や街路の構造、都市の中のどこにどういった施設を配置するか、といったことが書かれています。ただ、これに

は図がなく文章だけが書いてあるのでそれをどう解釈するかはなかなか難しいのですが、応地利明先生が、宇宙のモデルでもある曼荼羅を参照しながら、『アルタシャーストラ』の記述を基にした理想都市の配置図を示しています。全体は正方形で、これが南北、東西の街路によって4×4の16区画に分割されています。その全体は今度は中心側から外側に向かって四重の構造になっていて、一番真ん中に神殿域、次に王宮を含む高級な街区、3番目に官庁街、さらに外側に市場や宅地があるというモデルを復元されています。このように、全体が正方形をしていて、内側と外側が求心的な構造になっているというのが、古代インドの一つの都市モデルと考えられます。

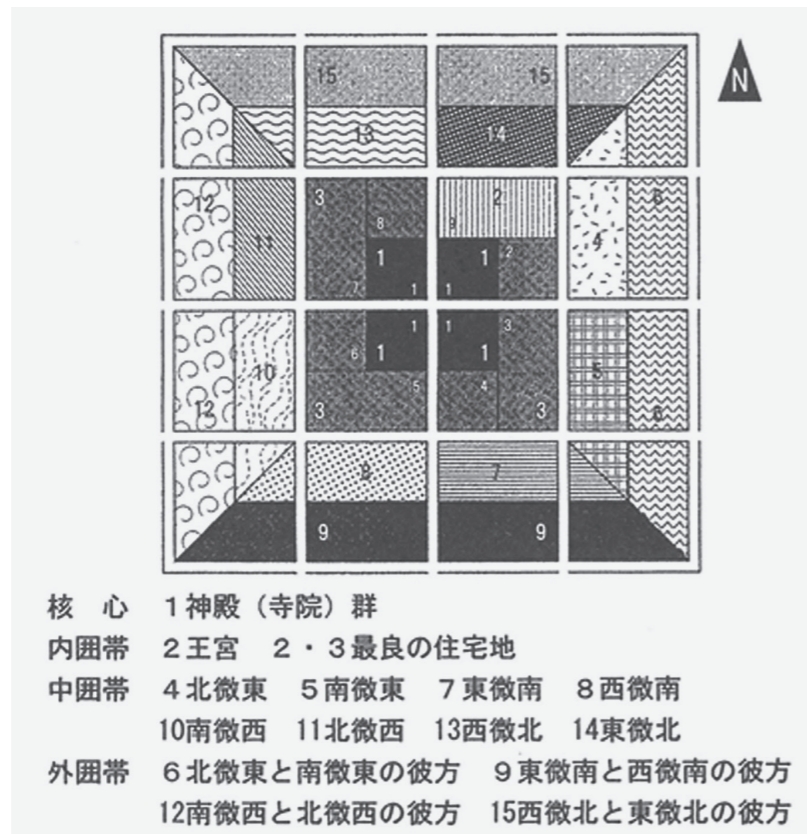


図3 「アルタシャーストラ」に基づく都市モデルの復元案 (応地 2011)

『アルタシャーストラ』だけでなく、各種の建築書と言われるものがあって、そのうちの『マーナサーラ』という6、7世紀頃に成立した書物には、基本的には設計寸法のこと書かれているのですが、その中にも曼荼羅を規範とした世界像、世界の表現としての都市について述べられています。

このように、文献的には古代インドにおいて都市の理想形がいろいろ考えられていたことが分かるのですが、実際にインドでそういう都市がつくられたのかについてはよく分かっていません。現存する中では、インドの南、タミール・ナドゥ州にシュリーランガムというヒンドゥー教の大きな寺院があって、全体が長方形で、4つの門を持ち、真ん中に本殿があるということで、先ほど見たような求心的な構成を持っています。シュリーランガム寺院は1世紀頃の創建と言われていますが、16、17世紀頃まで何度も造り替えられた記録があるので、今日見るような幾何学的な構成が初期の段階にまで遡れるのかについては、実はよく分かっていません。

3. 東南アジアにおける古代王都のあり方

真臘の古代都市

古代にはインドや中国のような、文明の中心になる地域というのがあります。東南アジアにとっては主にインドがそういう文明の中心としてあるわけです。そこに対して、東南アジアは周縁になります。そこが文明の中心ではない、周縁だからこそ、むしろインドで発明された様々な思想、特に支配の在り方がより先鋭的な形で取り入れられるという現象があります。もともと中心ではないところに新たに王権を築くというときに、それを人々に納得させるためにはいろんな仕掛けが必要になり、そういうものをインドから借りてきたということです。そして、単純にインドから持ってきただけでは

なく、もともとの土地の伝統と交じりながら土着化していく過程があるのだと考えられます。そのことを一番よく辿るのがカンボジアということで、カンボジアの伝統を見ていきしたいと思います。

先ほどオケオ遺跡のところ、扶南という国がカンボジアの発祥なのだという話をしました。カンボジアと言ってももちろん今の国境とは全然違い、領域はその時々で異なるので

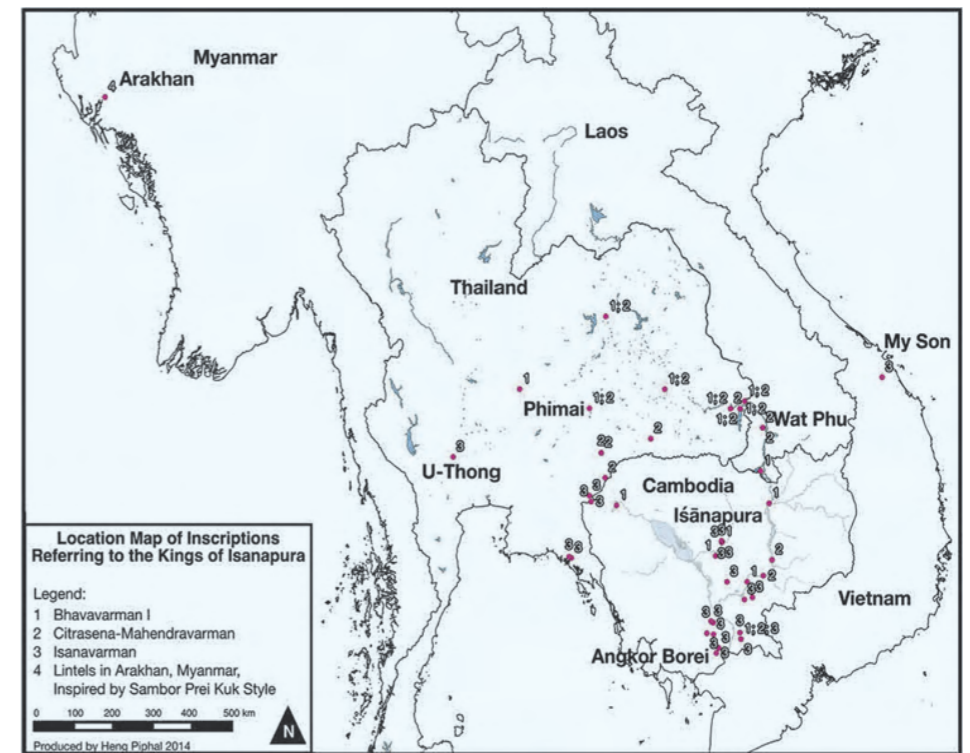


図4 イーシャナプラに言及する碑文の分布 (Temple Zone of Sambor Prei Kuk, Archaeological Site of Ancient Isanapura世界遺産登録申請書 2017)

すが、扶南が衰退した後に取って代わったのが中国の文献で真臘と言われるチェンラです。もともと扶南の属国だったと言われる、この真臘という国が7世紀の初め頃に独立してこの一帯を治めるようになります。

真臘の時代の首都は文献、碑文ではイーシャナプラと呼ばれています。カンボジア中部コンポントム州のサンボー・プレイ・クックという遺跡が真臘の都、イーシャナプラであることが確認されています。カンボジアの真ん中に東南アジア最大の湖トンレサップがあり、ここから少し北に上がった場所で、先ほどのアンコール・ボレイやオケオよりはずっと内陸側になります。これだけ内陸に入ってくるということは、国を支えるシステムが大きく変わったと考えざるを得ません。扶南やチャンパは外洋交易に大きく依存していましたが、真臘はおそらくそうではなく、農業生産に比重が移ってきたために、このような内陸に拠点を置いたと考えられます。

世界遺産になっている3つの寺院群があって、それぞれが正方形に近い非常に幾何学的な構成を持っていますが、そこには煉瓦造の寺院があるだけです。これとは別に、3つの寺院群から川を挟んだ西側に、東を川で断ち切れ、残る三方を城壁、城壁といっても土塁と環濠ですが、一辺2kmぐらいの区画施設で囲まれた場所があります。これがイーシャナプラの都市域にあたるかと考えられています。この周りを区画している施設がいつできたのかは分かりませんが、寺院群に関しては碑文や建築様式から6、7世紀頃の建設と分かっていますので、それと同時代だとすると、非常に幾何学的な外周壁を持った都市が東南アジアに初めて登場したことになります。王宮跡もまだ確認されていませんが、それが城壁の内側にあったとすると、王がいる世俗の都市域と神がいる神聖な寺院域とが、西と東に川を挟んで配置されていることになります。これは先ほど見た、神殿と王宮が同心円状にある全体が都市として包み込まれているようなインドのモデルとは若干違うと考えられます。さらに、この都市域と寺院域の軸線がずれているのも気になることです。

地に人工的に山を築き、その山を中心に都市を造るという発想になります。ここにシヴァ神の象徴であるリングを置くと、王都の中心に据えたということになります。

次の代の王が大きな貯水池をその北側に造りますが、このような貯水池と聖なる中心寺院が、その後のアンコールの都においてはセットとして造られています。このハリハララヤに

は、ヤショダラプラという次に移る都もそうですが、全ての川がクーレン山から流れてきます。クーレン山上の源流域に行ってみると、川底の岩盤にたくさん彫刻がされていて、シヴァリングが彫られていたり、ヴィシュヌ神が彫られていたりということで、これは明らかに聖地です。天から降った水がこういうところで浄化され、聖なる水となって流れ下り、都にある巨大な貯水池に貯められるということで、その水を農業用などに分配することが王の権力の基盤になっています。実利的にもそうですし、宗教的な権威付けとしても水が大きな要素になっていて、そのためにクーレン山からみて下流にあたる場所に都を造ったのだと思います。

さて、ようやくアンコールに移り、ヤショヴァルマンという王様がヤショダラプラという都を造ります。この新たな都の中心寺院として造られたのが、プノム・バケンという寺院です。先ほどのバコン寺院は平らな土地に盛土してピラミッドが造られましたが、プノム・バケンは、天然の岩山の上を削り取って段々を造り、寺院を築いています。このバケンが最初にアンコールの都ができたときの中心寺院になります。このプノム・バケンを中心に都があったのだらうということで、久しく都城域が想定されていました。部分的に濠跡が残ったりしているのですが、従来考えられていたようにぐるっと濠が全体を回ってなくて、実際には一部にしか濠がないということが近年分かってきました。そのため、本当にこういう都城域を想定しているのかという疑問が出てきた。一方で、プノム・バケンの北方にあるアンコール朝の最終的な都城アンコール・トムは12世紀の終わり頃に造られたと今まで考えられてきたのですが、そこを詳しく調査してみると実は10世紀ぐらいまで遡れるという説が出て



図7 バコン寺院 (©Apsara National Authority)



図8 クーレン山域のコバル・スピエン遺跡 (友田撮影)

きました。そうすると、最初からそこに都があったのだと、つまりプノム・バケンという山、中心寺院は都の中にあるのではなくて、都の南隣にあるということになります。ただし、王宮については、ピミアナカスという王宮寺院の場所は変わっていないと考えられるので、都城の中に王宮があって、中心寺院は外側にあり、王宮と中心寺院とが軸線で結ばれた関係にあるというのが、最初の構想だった可能性が出てきました。先ほどのサンボー・プレイ・クックとは違う形になりますが、軸線によって王宮と寺院が結ばれるという、厳格な構造が現れることとなります。同じく軸線については、王宮から東西軸を延ばしていくと東バライの貯水池に当たります。時代は若干下るのですが、その貯水池の中に中島があって、東メボンという寺院が建っています。東メボンの位置は貯水池の真ん中でなく少し南に寄っていますが、王宮の軸線の先に造ったためにこういう位置になったと考えられます。さらに時代が下りますが、この貯水池の西岸には非常に大規模な船着場があったことが、つい2年ほど前の発掘調査で分かりました。つまり、王宮から船着場に向かってずっと道が延びていき、そこから船に乗って貯水池の中の寺院に行くという明確な軸線がつけられていることが分かります。

きました。そうすると、最初からそこに都があったのだと、つまりプノム・バケンという山、中心寺院は都の中にあるのではなくて、都の南隣にあるということになります。ただし、王宮については、ピミアナカスという王宮寺院の場所は変わっていないと考えられるので、都城の中に王宮があって、中心寺院は外側にあり、王宮と中心寺院とが

軸線で結ばれた関係にあるというのが、最初の構想だった可能性が出てきました。先ほどのサンボー・プレイ・クックとは違う形になりますが、軸線によって王宮と寺院が結ばれるという、厳格な構造が現れることとなります。同じく軸線については、王宮から東西軸を延ばしていくと東バライの貯水池に当たります。時代は若干下るのですが、その貯水池の中に中島があって、東メボンという寺院が建っています。東メボンの位置は貯水池の真ん中でなく少し南に寄っていますが、王宮の軸線の先に造ったためにこういう位置になったと考えられます。さらに時代が下りますが、この貯水池の西岸には非常に大規模な船着場があったことが、つい2年ほど前の発掘調査で分かりました。つまり、王宮から船着場に向かってずっと道が延びていき、そこから船に乗って貯水池の中の寺院に行くという明確な軸線がつけられていることが分かります。

もう一つ、軸線の例を見てみたいと思います。アンコールが9世紀の初めに成立し、15世紀代まで続きますが、その間に一度遷都された時期があります。アンコール王朝は世襲ではないので結構もめごとが多いのですが、そのいさかいの中でアンコールから遷都されたのが、クーレン山のさらに北東側のコーケーという場所です。これも世界遺産になっています。コーケーは非常に短命の都なので、たくさん残っている遺跡の大半は同じ何十年かの中に造られたと考えられます。大きな貯水池があって、その北西側にプラサート・トムという中心寺院があります。この寺院の背後にはピラミッドがあり、ピラミッドの上にもともとどういものが建っていたかはよく分からないのですが、とにかく中心となるものを造って、都市がつくられたことが分かります。寺院が何かばらばらに散らばっているように見えますが、早稲田大学のチームが調査したところ、非常に明確な軸線が幾つも引けることが

分かります。もう一つ、軸線の例を見てみたいと思います。アンコールが9世紀の初めに成立し、15世紀代まで続きますが、その間に一度遷都された時期があります。アンコール王朝は世襲ではないので結構もめごとが多いのですが、そのいさかいの中でアンコールから遷都されたのが、クーレン山のさらに北東側のコーケーという場所です。これも世界遺産になっています。コーケーは非常に短命の都なので、たくさん残っている遺跡の大半は同じ何十年かの中に造られたと考えられます。大きな貯水池があって、その北西側にプラサート・トムという中心寺院があります。この寺院の背後にはピラミッドがあり、ピラミッドの上にもともとどういものが建っていたかはよく分からないのですが、とにかく中心となるものを造って、都市がつくられたことが分かります。寺院が何かばらばらに散らばっているように見えますが、早稲田大学のチームが調査したところ、非常に明確な軸線が幾つも引けることが



図9 プノム・バケン寺院 (©Apsara National Authority)



図10 ピミアナカス寺院 (友田撮影)

世界遺産の遺跡があります。8世紀の初め頃にジャワ島を支配していたシャイレンドラ王朝が大乗仏教の寺院として建てたと考えられています。全体は曼荼羅の平面形をしており、大きく分けると、一番下の基壇と言われる部分、その上に四角い段が5段あり、さらにその上に丸い段が3段あって、その真ん中に仏塔が載っているという構成です。この基壇と方形壇と円形壇のそれぞれが、欲界、色界、無色界という仏教の三界を表しているという解釈が一つの有力な説になっています。この段々の

壁面にはレリーフがたくさん彫られていて、経典に出てくる説話が彫刻されています。中心の仏塔を三重に取り囲む仏塔は全部で72基あり、中心を入れると73基ですが、これら72基の仏塔の中にはそれぞれ仏像が入っています。中心塔だけは中が詰まった仏塔なのですが、これらの仏の配置も密教の経典に則したものでしょうと言われています。ですから、これは1つの寺院であると同時に、密教の宇宙を表した立体曼荼羅と言えます。



図13 ボロブドゥール寺院

(<https://bahasa.wallpapers.com/wallpapers/matahari-terbit-yang-megah-di-candi-borobudur-di-indonesia-il0viuf0a1eacz5p.html>)

アンコールの寺院

先ほど見たアンコールの中心寺院、岩山の上に造られたプノム・バケン、中心がピラミッド状になっていて、たくさんのお堂がその上に並んでいます。真ん中に5つの堂がサイコロの目のように並び、その外に60の堂、さらにその外側に44の堂が並んでいて、全部で109、つまり中心の堂を108の堂が囲んでいます。108というのは古代インドから神聖な数とされていて、除夜の鐘の108、煩惱の数もそこから来ていると思いますが、そのミラクルナンバーである108になるように、こういう配置をつくったと考えられます。インドの考え方だと、大きな時間の流れというのも108が一つの単位になるそうです。ですので、やはり何かの宇宙観を反映してこの計画がされているということだと思います。

アンコール・ワットは、メール山、須弥山を象ったと広く言われています。碑文などのどこにもそうは書かれていないのですが、大きな意味では間違っていないだろうと思います。周りを濠が囲んでいて、回廊が何重にも巡るといのは、須弥山の周りを大海が囲んで同心円状の構造になっているというモデルにまさに一致します。先ほどのボロブドゥールのように経典と合致する訳ではないにせよ、インドの宇宙観がここに投影されているという事は言えると思います。ただ、これもLidarで見ると周囲にたくさん穴が空いていて、真ん中の石造の部分だけしか残っていないアンコール・ワットの周りに、もともとは多数の木造建物があったことが分かってきましたので、まだまだこれから解明すべきことは多いと思います。アンコール・ワットの平面図をみると、求心的、同心円的な構造であることは間違いないのですが、中心がずれています。先ほど寺院の基本は東正面と言いました

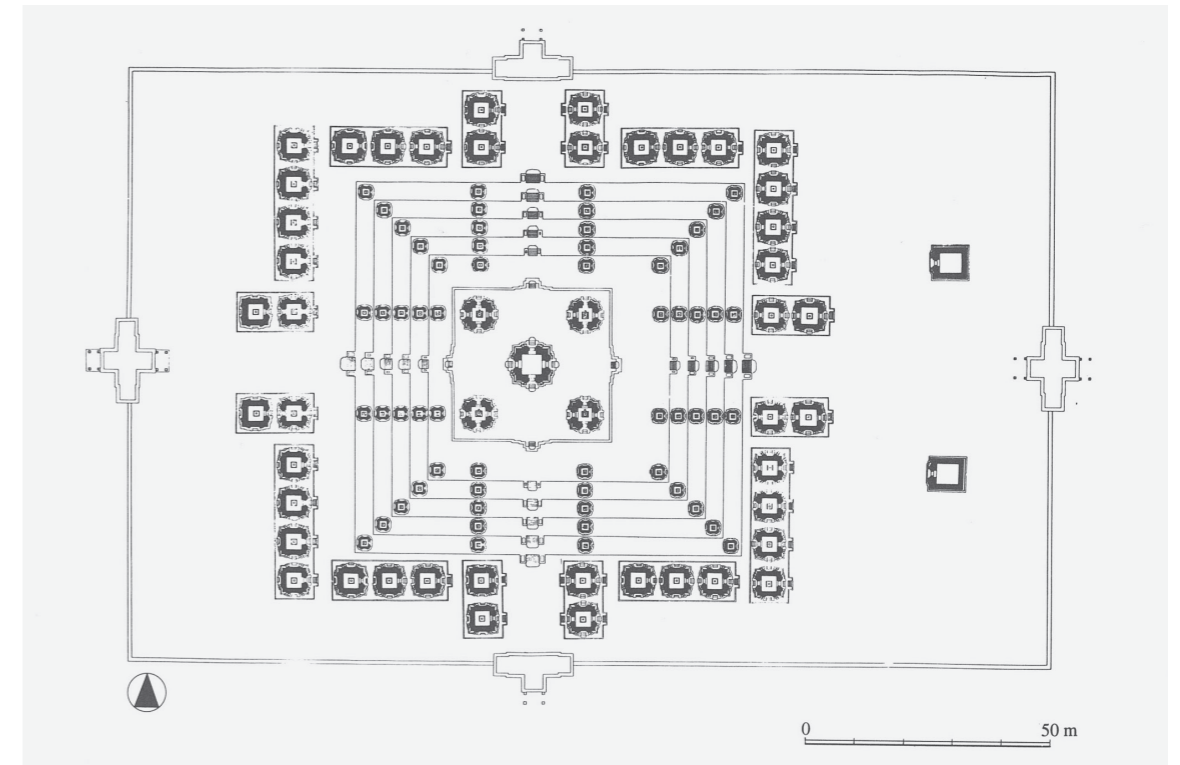


図14 プノム・バケン寺院の平面図 (Chihara 1996)

が、非常に例外的にアンコール・ワットはなぜか西正面で、西側の正面側が長くなっています。周囲から中心に向かっていくと同時に、正面の参道から来たときの軸線性、東西軸が強調されていることが明らかです。

クメールの寺院のほとんどが、実は左右対称ではありません。アンコール・ワットも例外ではなく、正面から見ると右側より左側の方がわずかに長く、右と左で塔の位置もちょっと違います。中心に向かっているようなのだけれども、実は中心軸からちょっとずれています。なぜ中心をずらすのかについても諸説あるのですが、バイヨンの位置が都城の正確な中心にないというのも、これと何か関係があるのかもしれない。

アンコール・ワットの回廊にはレリーフが彫られていて、ヒンドゥー教の神話や、この寺院を建設した

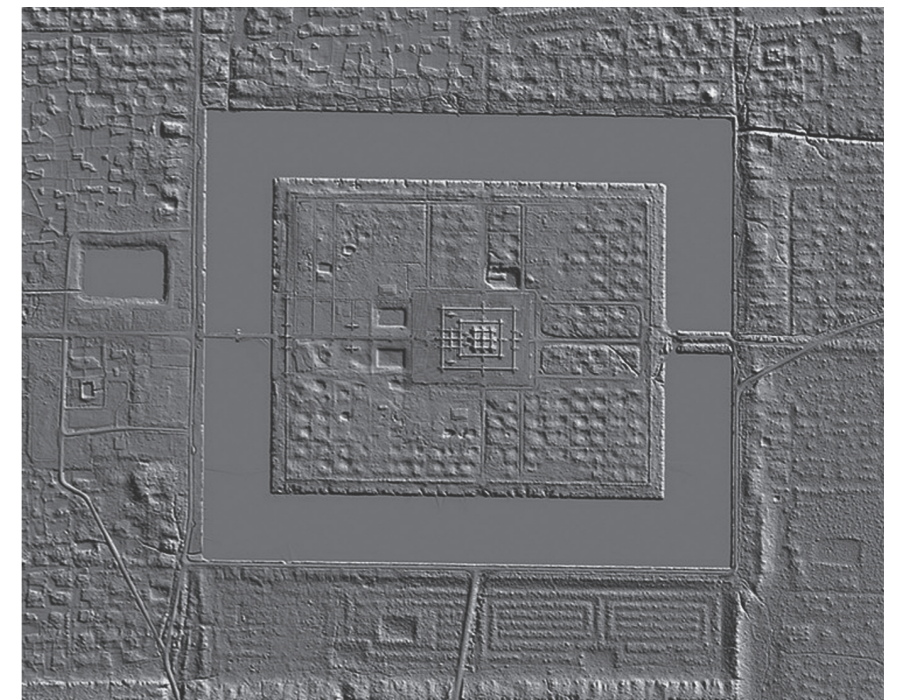


図15 アンコール・ワットのLidar空撮画像 (©The Greater Angkor Project)

スールヤヴァルマンⅡ世王の軍勢なども見られますが、一番有名なのが乳海攪拌という図で、神々と阿修羅が綱引きをしているという状況です。これ以前の寺院にはそこまで物語性の高いレリーフというのはなく、規模の面でも装飾の面においても、寺院建築のブレイクスルーがここであったと考えられるわけですが、そもそもこの寺院が何のために建てられたのかは碑文のどこにも記されておらず、いろいろと謎が多いことは確かです。



図16 プレア・ヴィヒア寺院からみたカンボジア平原 (友田撮影)

軸線状の構成という意味で忘れてならないのが、プレア・ヴィヒアという寺院です。その帰属をめぐってタイとカンボジアの間で紛争があり、北のタイ側から参道が伸びていて、地形から見ても自国領だとタイは主張してきました。最終的に国際司法裁判所で決着して寺院自体はカンボジア領になりましたが、周囲の多くの箇所でも国境が確定していません。このプレア・ヴィヒアは、クメールの神聖な儀礼のための重要な場と考えられ、非常に長い歴史をもちます。斜面の上に向かって参道が伸びていって、上がりきったどん詰まりのところに本堂があり、その背後は切り落ちた崖になっています。そこからはカンボジアの平原を見わたす形になります。ここでも軸線がずっと伸びていくのですが、その軸線の先に山があるというよりは、むしろ空に向かって軸線が伸びているような構成になっていることが分かると思います。ここにも乳海攪拌の図がありますが、代々の王が非常に大切な場所として儀礼を行っていました。

世界の中心としての寺院建築

アンコール朝の代々の王のほとんどはヒンドゥー教のシヴァ神やヴィシュヌ神を信仰していたのですが、バイヨンを建造したジャヤヴァルマンⅦ世は、大乘仏教、とりわけ観音菩薩を篤く信仰していたことが分かっています。仏陀と菩薩の三尊像が各地から出てくるのですが、王自身の姿と言われる像もあり、このような肖像彫刻が残るのはアンコールの歴代の王の中でもジャヤヴァルマンⅦ世だけです。このように非常に神格化された王であって、彼は観音菩薩と一体化することによってデヴァ・ラジャになるのですが、自らの都の中心にバイヨン寺院を建てることでそこを世界の中心にしたということになります。バイヨンは非常に不思議な建物で、写真のように顔がたくさん付いています。東西南北の各面に顔が付いた塔がたくさんあって、今では崩れてしまっているものや都城外周の門も含めると全部で256の顔があると言われていて、これが一体何を表しているのかについても諸説があります。バイヨンにもレリーフがありますが、先ほどのアンコール・ワットでは神話的なモチーフが中心だったのとは違い、バイヨンのレリーフの特徴は世俗の風景がたくさんあることです。ジャヤ

ヴァルマンⅦ世がチャンパ軍を駆逐してアンコールを奪還する戦争の様子が描かれていると思えば、すぐ下には庶民の生活の様子があつたりします。この王のおかげで平和な世界が取り戻されたと言いたいのではないかと思います。

バイヨンの本尊は破壊された状態で中心堂の地下から発見されたのですが、仏陀の像なのでこれが仏教寺院であることは間違いありません。一方で、彫刻の主



図17 バイヨン寺院の顔面塔 (友田撮影)

題からみると、中心から北側には主にシヴァ神、西側にはヴィシュヌ神、南側には仏陀が祀られていたことが分かります。もともとヒンドゥー教と仏教の間にはそんなに距離はないのですが、ヒンドゥー教も仏教も含めた神々のパネオン=多神殿のようなものがバイヨンということになります。王国の中の様々な神をここに集め、ジャヤヴァルマンⅦ世という観音の化身である王の下に統合したシンボルとしてこの寺院が建てられた、と解釈することができます。

バイヨンからの軸線が東西南北にずっと伸びていった先、都城の四方に門があります。王宮の正面にも門があります。これらの門を外から見ると左右に彫像が並んでおり、これは乳海攪拌の図をモチーフにしていて、神々と阿修羅が右と左に並んで綱引きをしている構図になります。蛇の胴体で綱引きをするのですが、それを真ん中で巻き付けた山を回転させて海をかき混ぜると万物が生まれたというストーリーです。証明しろと言われてもできないのですが、大きく見ると、門のところにいる人たちが引っ張っている蛇の回転軸にあたる山がバイヨンではないかと私は考えています。メール山=須弥山は山であって宇宙軸でもあると先ほど言いましたが、この真ん中にある宇宙軸がすなわちバイヨンである、と想像をたくましくすると言えるのではないかと考えています。

5. 平泉との比較

最後に平泉に触れていきます。12年ほど前に一度、平泉の研究集会で話をしたことがありますが、その時にいろいろ議論させていただいた「都市としての平泉」というテーマをめぐって、大きく4つぐらいの話題がありました。①都市の領域はどこなのか、②聖と俗のそれぞれのコア、宗教と政治はどういう関係になるのか、③宗教思想が都市計画にどういうふうに関係しているのか、④平泉は仏教の都として見たときにどのような独自性があるのか、といった議論がされたことと記憶しています。少々無理やりになりますが、これをここまで話と絡めて見ていきます。

都市の領域

先ほど、城壁の中だけが都市ではないという話をしました。時代が下りますが、マンガレーという都がミャンマーにあります。ここは濠で囲まれた非常に明確な王宮域を持っているのですが、この中

には王と貴族たちが住んでいて、その外側に一般の人たちが住んでいた都市がある。また、寺院も基本的にはこの王宮域の外側にあるという構成になります。ここで重要なのがマングレー・ヒルという山です。マングレー・ヒルはいわゆる聖山で、その上にも寺院があります。このマングレーヒルと結ぶ南北軸線が王宮の正面をちょうど通過しているというのが、全体の都市計画の基軸になって



図18 マングレー王宮とマングレー・ヒル (友田撮影)

いると考えられます。この軸線に平行する形で、東側にずっと僧院が並ぶ構造になっています。このように、この都市の範囲は城壁の中だけには収まらないということが間違いなく言えると思います。

それから、先ほど見たように、水路であったり、道路であったり、広域的なネットワークに接続されることによって都市が存続できます。そういう観点から見れば、平泉には奥大道という幹線道路があり、北上川がある、ということになります。都市として捉えたときに、特に川湊の存在が領域の支配と富を蓄える交易にとって不可欠な要素であることは間違いなくと思います。

宗教と政治の関係性

それから、宗教思想の反映ということについては、先ほど見たようにカンボジアの場合、最初のうちは寺院と都市とが東西に対置されていたものが、次第に一体化していき、最終的には都市の中心に寺院が造られた、という流れがありました。これを大きく見ると、世俗の世界の支配者である王が宗教的な崇拝の対象である神仏と一体化していくプロセスに並行した、必然的な流れとしてこのような現象が解釈できるのではないかと思います。一方、上座部仏教のミャンマーやタイにおいては、王が釈迦と一体などということではなく、王はあくまでも仏教の敬虔な信徒であって、その善良な守護者であるということが王権を支える考え方になります。敬虔な信者であることを示すためには寺院を建てまくることが非常に重要であって、ミャンマーの世界遺産のバガン遺跡では3,000以上の寺院がそこらじゅうに建っているという風景があります。

平泉を見ますと、奥州藤原一族は王様ではありませんが、それでも領域を支配する上では、阿弥陀仏を崇拝する敬虔な仏教の守護者としての姿を可視化することが非常に重要だったのではないかと思います。つまり、平泉に非常に荘厳な寺院を造る目的は、自分の極楽往生ということだけではなく、そのような領域支配のための演出装置としての意味合いが考えられるのではないのでしょうか。

宗教思想と都市計画の関係性

古代インドの世界観とは別に、軸線が重要という話をしました。軸線、特に山に向かっていく軸線への意識というのは、どうも東南アジアでは基底文化として見られる。インドとは異なる要素、も

もとの在地の文化としてあって、それがインドの世界観と融合して、先ほど見たような都市計画がなされたと考えられます。インドネシアの中でヒンドゥー教がほとんどそこにだけ残っているバリ島を例にしますと、バリの寺院は方角がいろいろですが、アグン山という聖なる山に向かって軸線があり、山の南側だと南が正面だし、山の北側にある寺院は北が正面ということになります。いわゆる南北軸、東西軸とは違う、このような山に向かっていく軸線というのは、日本にもたくさん例があると思います。例えば鎌倉では、鶴岡八幡宮が山の麓のようところにありますが、そこに向かって軸線が延びて、これは南北軸とは関係ない軸線になります。鎌倉の領域性は山によって囲まれているということですが、その全体が一つの計画に則っているかというところではなく、中心を貫く一つの軸線だけがものすごく重要であるというのは、東南アジアの基層文化と共通する部分があるのではないかと思います。平泉に関しても、山に向かっていく軸線が都市計画上の基準になっているということはあるのではないかと思います。



図19 プサキ寺院とアグン山
(<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=109493278>)

仏都としての独自性

平泉の場合、都市づくりに仏教思想が反映していると主張されているので、他の地域の類例を知りたいと思うのですが、東南アジアの例を見ている限りは、今日は仏教とヒンドゥーをあまり明確に分けて話しませんでした。仏教独自の思想が都市計画に反映した形跡は辿りにくいというのが正直なところ。大乘仏教のポロブドゥールや、ヒンドゥー教のアンコール・ワットのように宇宙観をそのまま造形することは古代においては見られますが、もう少し時代が下ってくると、何かそういう宇宙観が寺院に直接的に投影されるということもなくなってきます。むしろ、ある理想化された宮殿の形みたいなものが寺院の姿になっています。マングレーにあるシュエナンドーという寺院はもともとアマラプラという1つ前の時代の王宮にあった建物を移築したと言われていますが、王宮の建物=宮殿と寺院とで基本的には形が違わないのです。このように、天界の宮殿のようなイメージが寺院の一つの理想形とみなされたというのは、日本の寺院建築、特に阿弥陀堂の在り方と通じる部分があるように思います。平泉の場合、絵画的な演出性のようなものが非常に強く感じられますが、それは正面性あるいは軸線性といった要素と関係しているのかもしれない。

ちょっと雑駁になりましたが、以上で終わりにします。ありがとうございました。

<図版出典>

P4 図1 ピューの古代都市群 (Pyu Ancient Cities世界遺産登録申請書 2013)

P5 図2 オケオとアンコール・ボレイの立地 (Jacques 2007に加筆)

- P7 図3 「アルタシャーストラ」に基づく都市モデルの復元案 (応地 2011)
- P9 図4 イーシャナプラに言及する碑文の分布
(Temple Zone of Sambor Prei Kuk, Archaeological Site of Ancient Ishanapura世界遺産登録申請書 2017)
- P10 図5 サンボー・プレイ・クック遺跡の全体図 (©EFEO)
- P12 図6 クーレン山の風景 (浅田なつみ氏撮影)
- P12 図7 バコン寺院 (©Apsara National Authority)
- P13 図8 クーレン山域のコバル・スピエン遺跡 (友田撮影)
- P13 図9 プノム・バケン寺院 (©Apsara National Authority)
- P14 図10 ピミアナカス寺院 (友田撮影)
- P15 図11 コーケー遺跡群の全体図 (溝口・中川 2011)
- P16 図12 アンコール中心域のLidar空撮画像 (©The Greater Angkor Project)
- P17 図13 ボロブドゥール寺院
(<https://bahasa.wallpapers.com/wallpapers/matahari-terbit-yang-megah-di-candi-borobudur-di-indonesia-il0viuf0a1eacz5p.html>)
- P18 図14 プノム・バケン寺院の平面図 (Chihara 1996)
- P19 図15 アンコール・ワットのLidar空撮画像 (©The Greater Angkor Project)
- P20 図16 プレア・ヴィヒア寺院からみたカンボジア平原 (友田撮影)
- P21 図17 バイヨン寺院の顔面塔 (友田撮影)
- P22 図18 マンダレー王宮とマンダレー・ヒル (友田撮影)
- P23 図19 ブサキ寺院とアゲン山 (<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=109493278>)

<参考文献>

- 岩田慶治、杉浦康平編 (1989) 『アジアの宇宙観』、講談社
- 応地利明 (2011) 『都城の系譜』、京都大学学術出版会
- 肥塚隆編 (2019) 『アジア仏教美術論集 東南アジア』、中央公論美術出版
- 下田一太ほか (2015)、「クメール古代都市イーシャナプラの都城区における活性期」『東南アジア考古学』35号
- ジャック・ゴシエ (2019) 「アンコール・トムー都市の外郭に関する都市史的考察」『東南アジア古代都市・建築研究会』、東京文化財研究所
- G. セデス (2002) 『東南アジア文化史』新装版、大蔵出版
- 東京文化財研究所編、友田正彦編著 (2025) 『大陸部東南アジアの古代木造建築を考える』、鹿島出版会
- 中川武編 (2023) 『アジアの仏教建築』、丸善出版
- 布野修司編 (2003) 『アジア都市建築史』、昭和堂
- 布野修司 (2006) 『曼荼羅都市ーヒンドゥー都市の空間理念とその変容』、京都大学学術出版会
- 溝口明則、中川武監修 (2011) 『コー・ケーとベン・メアレア クメール帝国東地区の二大遺跡群』クメール帝国地方拠点の都市遺跡と寺院遺構に関する研究
- Chevance, Jean-Baptiste. et al. (2019) "Mahendraparvata: an early Angkor-period capital defined through airborne laser scanning at Phnom Kulen" , ANTIQUITY, volume 93, Issue 371, online,

- Cambridge University Press
- Chihara, Daigoro (1996) Hindu-Buddist Architecture in Southeast Asia, Studies in Asian Art and Archaeology, volume XIX, Leiden, E.J.Brill
- Clark, Joyce (2007) Bayon: New Perspectives, Bangkok, River Books
- Coe, Michael D. & Evans, Damian (2003) ANGKOR and the Khmer civilization, London, Thames & Hudson
- Gaucher, Jacques (2007) De la maison à la ville en pays tamoul ou la Diagonale interdite, MÉMOIRES ARCHÉOLOGIQUES 23, Paris, École Française d' Extrême-Orient
- Hendrickson, Mitch et al. (2023) The Angkorian World, New York, Routledge
- Jacques, Claude (2007) The Khmer Empire: Cities and Sanctuaries from the 5th to the 13th Century, Bangkok, River Books
- Stark, Miliam et al. (2018) "The Angkorian city: From Hariharayala to Yashodharapura" , ANGKOR: Exploring Cambodia's Sacred City, Singapore, Asian Civilization Museum
- Tainturier, Francois (2021) Mandalay and the Art of Building Cities in Burma, Singapore, NUS Press

研究報告1 「無量光院の可視領域に基づく平泉空間構成の特徴」

千葉工業大学 助教 磯野 綾

1. はじめに

奥州藤原氏によって、11世紀に造営された平泉の形成過程や都市構造は仏教思想^{1)~7)}と関連していたとされる。中でも3代秀衡が建立した無量光院は堂宇や土塁の大半が失われているものの、その空間構成が浄土庭園の最も発展した形態として高く評価されている。

無量光院の立地については吾妻鏡^{註1)}に平泉館・加羅御所との関連が示されているほか、発掘調査により柳之御所（平泉館）と橋で接続していたことも明らかとなっている。さらに、近年では公的機関によって11世紀平泉の再現映像が作成・公開されており、その表現に差異はあるものの、これらの映像では柳之御所から無量光院が目視可能な表現がされている。これらの映像は柳之御所から無量光院が視認可能であり、両施設間に視覚的な繋がりがあった可能性を示唆している。

そこで本研究は建物や土塁の標高データを再現したうえで、地理情報システムを用いて無量光院の土塁内部（以下「境内」という。）及び周辺からの可視領域を抽出する。そして、この抽出結果に基づき、無量光院周辺が一体的な空間として構成されていたかどうか、またその場合にどのような空間構成であったのかを「人の視認性」という観点から明らかにし、平泉の空間構成の特徴を考察することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 研究の構成

本研究は、全6章で構成される。

第1章では、本研究の背景と既往研究を整理し、目的を示す。

第2章では、用語の定義、地形・建築物モデルの設定、可視領域解析の手法、さらに分析の前提条件と視点設定を示す。

第3章では、土塁の高さや延長の設定ごとに無量光院の堂宇が平泉のどこから視認可能であったかを分析し、その特徴を示す。

第4章では、境内各視点位置及び土塁の高さの設定ごとに可視領域を比較し、視点や土塁の設定条件ごとの浄土庭園の空間構成の特徴を考察する。

第5章では、柳之御所及び伽羅御所（推定地）の可視領域を抽出し、無量光院との関連を「人の視認性」という観点から示す。

第6章では、前章までの内容を総括し、無量光院と平泉の空間構成の特徴をまとめる。

(2) 用語の定義

- ・可視領域：ある特定の視点から、地形や建物等に遮られずに視認できる範囲（図1）
- ・被可視領域：ある特定の対象物が、地形や建物等に遮られずに視認され得る位置の集合（図2）

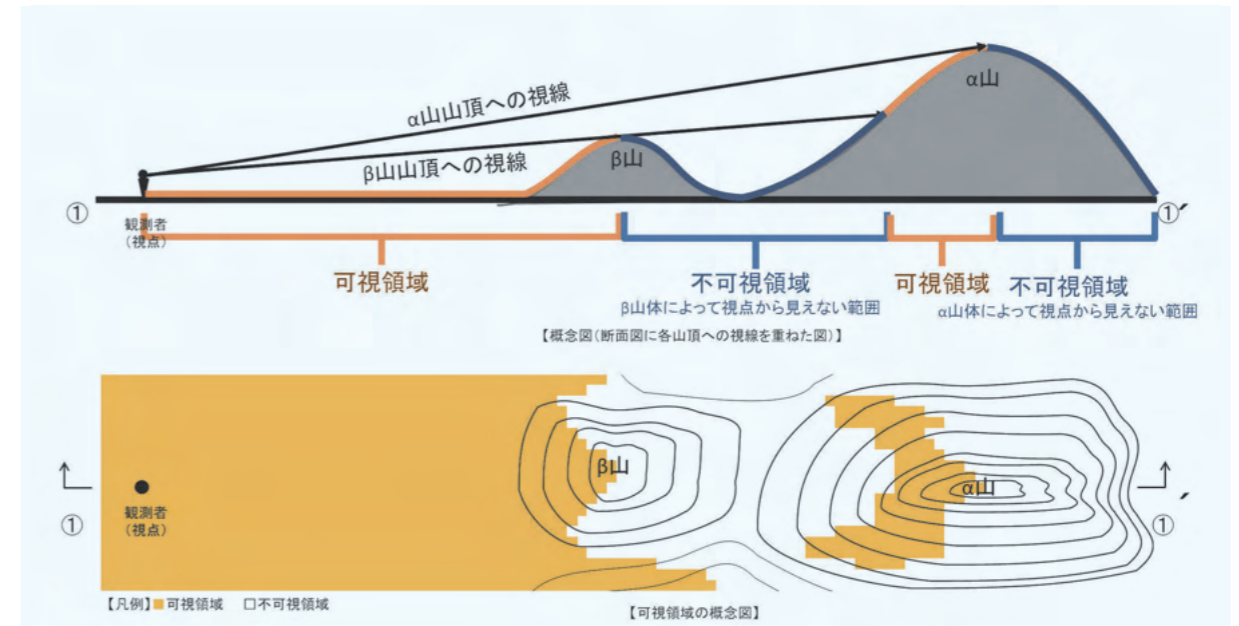


図1 可視領域の概念図

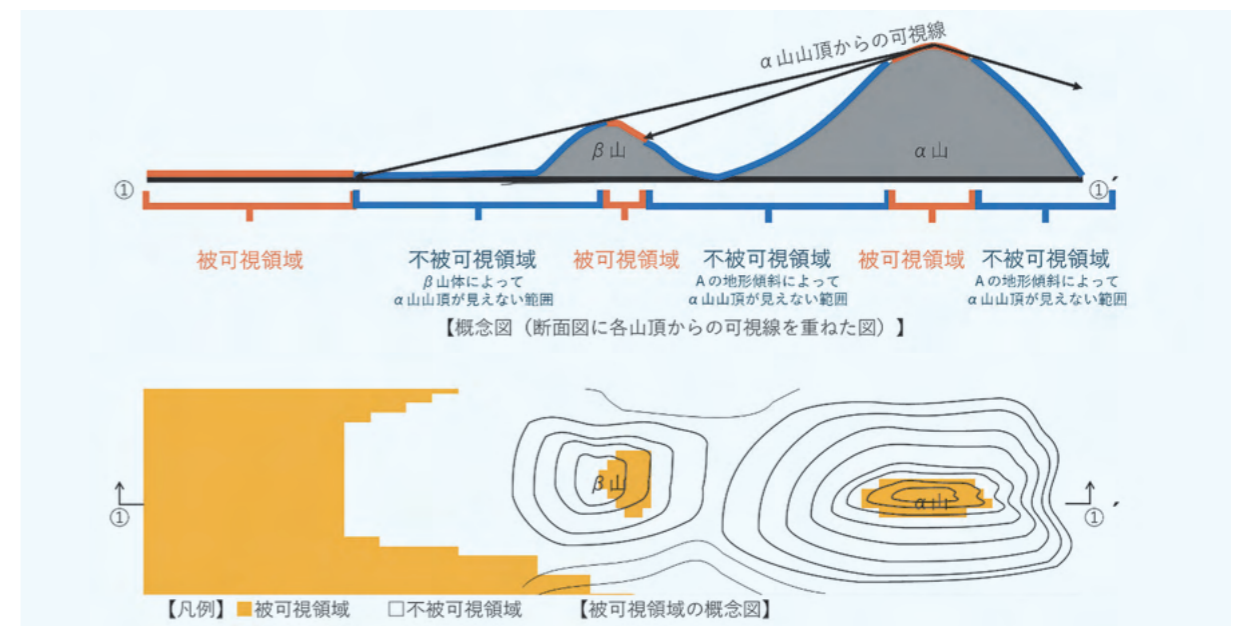


図2 被可視領域の概念図

(3) 研究手法

本報告は当時の人の視点に立ち、無量光院の景観を三段階構成で整理・分析する。

①三次元点群データ測量による地形データの取得

可視領域及び被可視領域の抽出にあたり、無量光院の土塁などの再現に必要な地形データを取得するため、ドローン及びVLX（歩行型3Dスキャナー）を用いて三次元点群データを取得する。

②地形再現の諸設定

- ・無量光院の建築物（堂宇）

無量光院遺跡に想定される堂宇については、建築意匠の再現ではなく、位置・平面占有範囲・高さ

を正確に反映するため、視域解析用の簡略モデル（箱モデル）として作成する。

平面形状は無量光院の発掘調査報告に基づき設定し、また、高さは吾妻鏡に「悉以所摸宇治平等院也」とあることから平等院鳳凰堂を参考値として設定した（図3）。

・無量光院の土塁の高さ

土塁を三次元点群データ測量により得られた標高値で再現する。

土塁の詳細形状ではなく、可視領域に影響を与える代表的高さに着目したため、考古学的再現値に基づき固定標高として再現した。これは可視領域解析において一般的な簡略化であり、視界遮蔽の有無を評価する目的には十分な精度を有すると判断した。

また、三次元点群データ測量によって取得した地形データによると、東側土塁の高さ（標高平均約35m）と西側土塁の高さ（標高平均約32m）が異なることから、高さを2条件（35m・32m）で設定した。これにより、土塁高の違いが可視領域に与える影響を比較する。

・無量光院の土塁の延長

点群等から抽出した健全断面及び既往資料⁹⁾より想定した土塁芯線を用いて、欠損区間を含む土塁形状を幾何学的に一貫したモデルとして構築する。本モデルは復元図そのものではなく、断面形状の特性値を制約条件とした補間・想定モデルである。

なお、土塁の欠損があることから土塁延長も2条件で設定した。モデルAは図4を参考に柳之御所にかかる橋から建築物（推定）間を除いた範囲を延長として設定し、モデルBは柳之御所にかかる橋の橋台部以外の範囲を延長として設定した（図5）。

・柳之御所の標高

柳之御所遺跡は遺跡公園整備に伴い約1mの盛土が施されている¹⁰⁾ことから、この盛土分を-1mで補正し、解析条件を他地域と統一した。

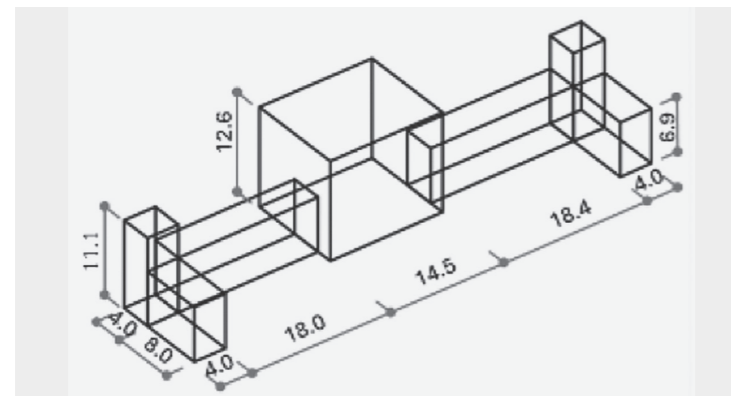


図3 本研究で設定した無量光院建築物モデル

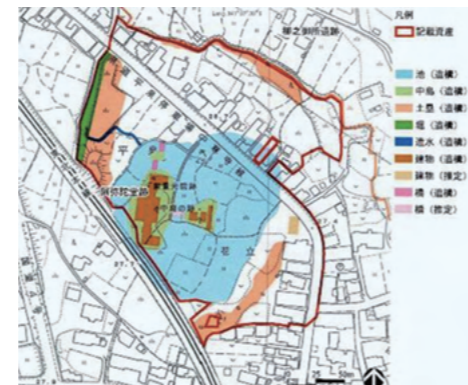


図4 無量光院土塁延長設定に関する資料
図の出展：参考資料9



土塁延長モデルA



土塁延長モデルB

図5 本研究で設定した土塁延長モデル

(4) 可視領域及び被可視領域の抽出

地理情報システムQGIS3.44.5を使用し、前節で設定した地形及び建築物のデータに基づき、地形と建築物を考慮した可視領域及び被可視領域解析（以下「可視領域等」という。）をViewshed機能によって抽出する。

この際、11世紀の遺跡検出面から現在の地表面の土の被り厚は平泉内で一定であると仮定し、可視領域等を抽出するための地形データは国土地理院数値地図標高モデル5mメッシュを採用した。本研究は広域的な視認可能範囲の比較を目的としており、解像度5mはその目的に対して妥当と判断した。これに伴い、前節で再現した地形等も解像度5mとし、すべての解析を同一解像度で行うことで、条件間比較の一貫性を確保する。ただし、柳之御所東側のバイパス及び遮音築堤は前節の柳之御所標高の補正対象外の範囲であり、土の被り厚は他の場所と異なることから、可視領域等は抽出するものの解析結果の考察対象からは除外する。

また、可視領域を抽出する際の人の目線高さは原則1.5mとする。ただし柳之御所28SB2では想定建物床高1mを加え2.5mとする。

なお、可視領域等を抽出する際の視点の詳細設定は各章の冒頭で説明する。

(5) 考察の視点

可視領域等に基づく分析結果をもとに次の三点の考察を行う。

- ① 可視領域等に基づき、無量光院は平泉のどの範囲から、中堂のどこまで視認されたのか。
- ② 可視領域に基づき、無量光院の中島や対岸から堂宇はどのように視認されたのか。
- ③ ①及び②に基づき、無量光院周辺の空間構成の特徴を明らかにする。

3. 無量光院の被可視領域の特徴

無量光院堂宇の被可視領域を抽出する際は、無量光院中堂前面の中心を含むメッシュにおいて、棟高、垂木高、地盤高の3点の高さそれぞれを抽出点として設定した。前者2点は無量光院中堂の一部を視認可能な範囲を、地盤面の点は無量光院中堂全景を視認可能な範囲を示すものである。

(1) 国土地理院数値地図標高モデル5mメッシュに基づく被可視領域

土塁等を再現しない場合の標高モデルに基づく分析では、無量光院中堂の棟・垂木を抽出点とした際、両者の結果に大きな差はなく、いずれも平泉の広い範囲から視認可能であることが明らかとなった（図6）。一方、無量光院中堂全景（地盤高）は視認可能範囲が限定的であるものの、金鶏山、鈴掛の森、塔山、高館等の高台、志羅山地域、白山社、柳之御所堀内部地区・外部地区等からは視認可能であった。しかし、伽羅御所（推定）周辺は被可視領域外であり、この周辺からは無量光院中堂の一部のみが視認可能で、全景を視認することはできない地形条件であることが明らかとなった。

(2) 標高35m土塁を再現した際の被可視領域

標高35mで土塁モデルAを設定した場合、無量光院中堂の被可視領域は抽出点が棟・垂木・地盤のいずれを抽出点とするかによって大きく異なる結果となった（図7）。

まず、棟を抽出点とした場合、土塁近傍を除く平泉の広い範囲から視認可能であった。一方、垂木を含む屋根部分は無量光院南側の地域から視認することが出来ず、屋根の一部分のみが見えるにとどまった。

さらに、無量光院中堂全景が視認可能な抽出点（地盤高）とした場合は、被可視領域は極めて限定され、柳之御所堀内部地区・高館の山腹の一部、金鶏山山頂付近に限られた。これは棟や垂木を抽出点とした場合と比較して、視認可能範囲が著しく狭いことを示している。

(3) 標高32m土塁を再現した際の被可視領域

標高32mで土塁モデルAを設定した場合、標高35mモデルの土塁を用いた結果と比較して、棟及び垂木を抽出点とした際の被可視領域は全体的に拡大した。特に垂木を抽出点とした際の差異が顕著であった（図8）。

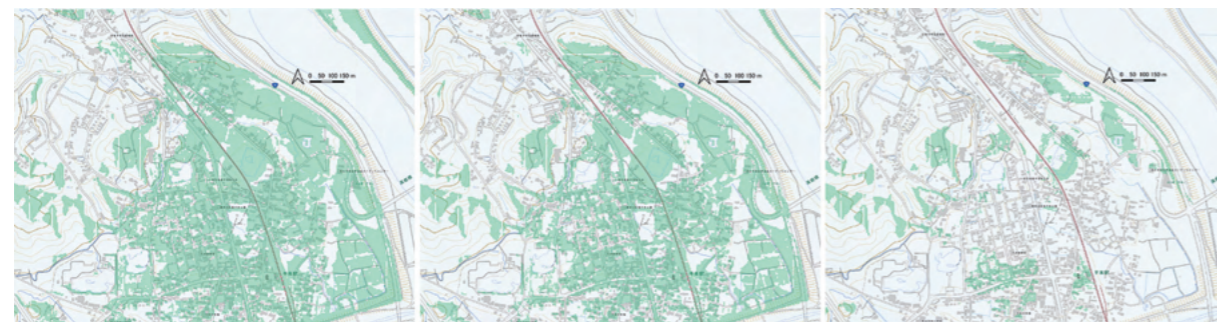
土塁標高35mモデルでは、垂木を抽出点にした場合、無量光院の南側がほぼ被可視領域外であり、南側とそれ以外の方向とで被可視領域の範囲に明確な偏りがあった。しかし、土塁標高32mモデルでは無量光院の南側も被可視領域に含まれており、土塁標高35mモデルと比較すると東西南北の視認範囲の偏りは小さかった。このことから土塁の東西で標高を異なって構築することで、平泉各地から無量光院中堂の同一部位を視認できるよう配慮した景観設計的な意図があった可能性が考えられる。

一方、無量光院中堂全景が視認可能な抽出点（地盤高）とした場合、柳之御所堀内部地区、高館の山腹の一部、金鶏山に加え、鈴掛の森及び塔山が含まれたものの、無量光院南側地域は土塁標高35mモデルの場合と同様に被可視領域外であった。

(4) 土塁延長設定を変更した際の被可視領域

標高35m及び32mで土塁モデルBを設定した場合、金鶏山及び高館周辺における被可視領域の範囲はいずれも土塁モデルAと比較して大きな差は見られず、同一の傾向を示した（図9）。

一方、柳之御所では土塁モデルBは土塁モデルAより被可視領域が狭域となるものの、堀内部地区（道路周辺）からは中堂全景を視認できるという結果が得られた。



抽出点：中堂棟 抽出点：中堂垂木 抽出点：中堂地盤高
図6 土塁を再現しない場合の無量光院の被可視領域（凡例：■可視領域）



抽出点：中堂棟 抽出点：中堂垂木 抽出点：中堂地盤高
図7 土塁標高35m再現時の無量光院の被可視領域（凡例：■可視領域）



抽出点：中堂棟 抽出点：中堂垂木 抽出点：中堂地盤高
図8 土塁標高32m再現時の無量光院の被可視領域（凡例：■可視領域）



土塁標高35m（凡例：■可視領域） 土塁標高32m（凡例：■可視領域）
図9 土塁モデルB再現時の無量光院の被可視領域

(5) 本章のまとめ

現在の標高データに基づく分析では、無量光院中堂は平泉の広い範囲から視認可能であった。しかし、土塁データを含めた標高モデルを設定した場合、土塁によって視線が遮られ、無量光院の近傍域では中堂は視認できなかった。また、抽出点の位置によって視認可能な部位が異なり、中堂全景が視認可能な場所は柳之御所堀内部地区の一部、高館の山腹、金鶏山山頂付近等の高台の一部に限られていた。

これらの結果から、当時の周辺域の人々は無量光院中堂の全景を直接見ることはできなかったものの、広い範囲から存在を感じ取り得る状況にあったと推察される。これは無量光院と人々の間に景観工学¹⁾における「見る一見られる関係²⁾」が形成され、無量光院が仏国土平泉を象徴的に意識させる視覚的装置として機能していた可能性を示唆している。

一方、無量光院中堂の全景が視認可能な範囲は、山域等の高台を除くと柳之御所堀内部地区に限定されていた。このことは無量光院と柳之御所の間、視覚的な繋がりがあったことを示す。つまり、政庁であった柳之御所は此岸に在って浄土を垣間見ることが可能な特別な場所であると同時に、無量光院（浄土）側からも見ることが出来る場所であった可能性が高い。

4. 無量光院土塁内の景観の特徴

本章では、境内における景観の特徴を考察するため、視点を①拝所があったとされる中島、②中堂を起点にした池の対岸（以下「対岸」という。）の2点に設定し、それぞれから可視領域を抽出した。なお、本章では視線方向を無量光院の堂宇に限定して考察するため、視点後方に位置する土塁の開口部の範囲は視界に含めず、考察対象外とした。この視線方向の前提から、土塁延長を長く設定する土塁モデルBに基づく考察は本章では行わないものとする。

(1) 国土地理院数値地図標高モデル5mメッシュに基づく境内の可視領域

土塁等を再現しない標高モデルに基づく分析では、中島及び対岸を視点としたとき、志羅山地域周辺の可視領域に一部差異があったものの金鶏山・鈴掛の森・塔山等の高台はいずれも視認可能との結果を得た(図10)。



視点位置：中島

視点位置：対岸

図10 土塁を再現しない場合の視点位置を境内各所とした可視領域(凡例：■可視領域)

(2) 標高35m土塁を再現した際の境内の可視領域

標高35mで土塁モデルAを設定した分析では、視点設定位置が中島及び対岸の場合では金鶏山周辺の可視領域の範囲に差異があった(図11)。

まず中島を視点とした場合、中景域に位置する金鶏山を含む無量光院西側の山稜は可視領域に含まれず、可視領域は近景域の境内に限定された。また人の視野60°^(注3)内に存在する対象は池を前景とした無量光院中堂及び翼廊に限られた。

一方、対岸を視点とした場合、無量光院堂宇全景に加え、金鶏山山頂を含む西側の山稜の一部が可視領域内に含まれた。さらに対岸から中堂への人の視線角度は水平・垂直共に10度以内であり、視線を動かすことなく一つのまとまりとして視認できる見えの大きさ⁽¹⁾であった。つまり、金鶏山等の西側山稜を背景に、池を前景とした無量光院堂宇を一体的に視認できたといえる。

(3) 標高32m土塁を再現した際の境内の可視領域

標高32mで土塁モデルAを設定した分析結果を、土塁標高35mモデルの結果と比較すると、中島を視点とした際の可視領域の範囲に大きな差は認められなかった(図12)。また対岸を視点とした際も、金鶏山中腹の一部で土塁標高32mモデルの結果のほうが可視領域が僅かに広いものの、視野60°以内における景観の特徴には大きな違いは見られなかった。つまり、土塁標高が35mであっても32mであっても、無量光院中堂のみを見ることができる中島と、無量光院堂宇と金鶏山等の西側山稜を一体的に見ることができる対岸という基本的な見え方に違いはなかった。

(4) 本章のまとめ

土塁等を再現しないデータに基づく分析では、拝所があったとされる中島及び池の対岸からは金鶏山中腹(標高約40m)以上と周辺が視認可能であるとの結果が得られた。

しかし、土塁及び建築物を再現した標高モデルでは、中島を視点とした際に金鶏山は視認されず、

人の視野60°内に収まる景観は近景域の無量光院中堂のみであった。一方、対岸を視点とした場合、無量光院堂宇と金鶏山山頂の一部が視認可能であり、視野60°内には中景域に金鶏山山頂等の西側山稜の一部と、それらを背景にした近景域に無量光院土塁と堂宇が収まる景観が形成されていた。

以上より、中島に存在したとされる拝所は金鶏山を含む浄土空間を望む場というより、中堂(阿弥陀如来)への拝仏を主とする空間であったと考察できる。一方、金鶏山を含む浄土空間の景観体験には対岸程度の視距離が必要であることが明らかとなった。

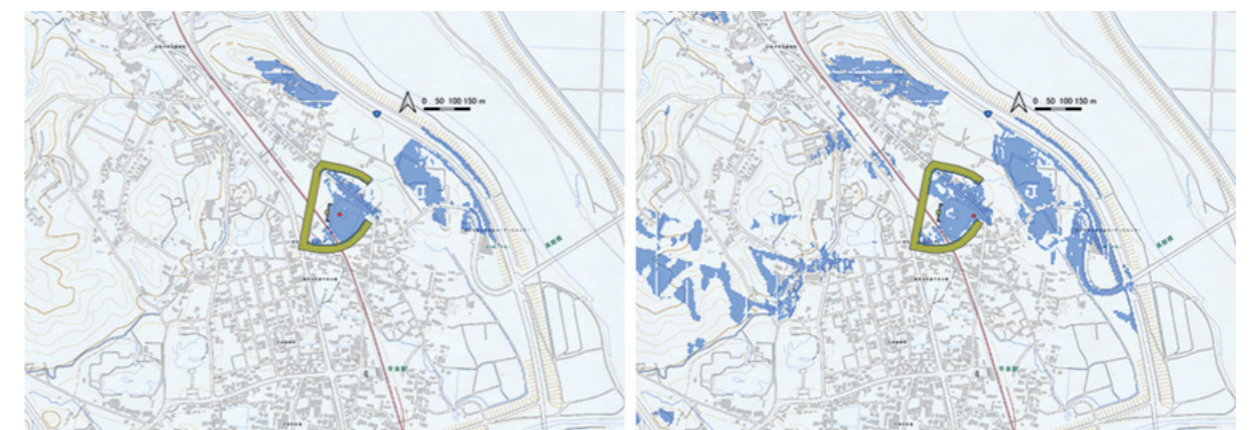
これらの結果から、無量光院は土塁によって視界が限定された圍繞景観の中で、視点の位置(堂宇からの視距離)によって「中島：仏を拝む景観」と「対岸：金鶏山を含んだ浄土景観を体験できる景観」が段階的に変化する空間構成を有していたと考えられる。つまり、対岸を視点としたとき、対岸を此岸と捉えると浄土世界の象徴である金鶏山を含んだ西側山稜から阿弥陀が来迎する様子を視認できる来迎図(図13)のような景観を体験できた可能性がある。一方、中島を視点としたとき、死後に極楽浄土に往生し蓮花の上に生まれ変わる体験を象徴するように、池と堂宇のみが視認できる景観(図14)が成立したと推察できる。これは無量光院が浄土や輪廻転生を疑似的に体験できる意図を持った空間構成であった可能性を示唆している。



視点位置：中島

視点位置：対岸

図11 土塁標高35m再現時の視点位置を境内各所とした可視領域(凡例：■可視領域)



視点位置：中島

視点位置：対岸

図12 土塁標高32m再現時の視点位置を境内各所とした可視領域(凡例：■可視領域)



図13 阿弥陀聖衆来迎図（一部）



図14 絹本著色浄土曼荼羅図

左図：阿弥陀聖衆来迎図
鎌倉時代・14世紀
東京国立博物館所蔵

右図：絹本著色浄土曼荼羅図
平安時代・12世紀
奈良国立博物館所蔵

5. 柳之御所及び伽羅御所（推定）の可視領域と無量光院の視認の特徴

第3章の被可視領域分析から、柳之御所堀内部地区及び伽羅御所（推定地）の内、無量光院中堂が視認可能と推定される地点を視点として、可視領域を抽出した。その結果、再現した土塁の高さによる可視領域の範囲の大きな差異は確認できなかった（図15、図16）。

柳之御所堀内部地区において、中心部と想定されている大型建物の検出地点周辺から無量光院を望む場合、鈴掛の森・堂山周辺を背景に土塁に囲まれた無量光院堂宇が視認でき、その視界右側に金鶏山が位置した。同じ堀内部地区であっても南側では、金鶏山山頂－無量光院堂宇がほぼ一直線状に並んで視認可能な地点があった。ただし、「柳之御所遺跡保存整備事業報告書¹⁰⁾」によると、柳之御所の中心部は板塀で囲まれていると想定されている。板塀の高さを2mと仮定すると地表からの視界は板塀に遮られ無量光院堂宇が視認できない。従って、28SB2の建物など地盤面より高い位置からのみ、無量光院堂宇は視認可能であったと考えられる。

一方、伽羅御所（推定地）周辺では、中堂の屋根の一部を視認可能であったものの、土塁に阻まれ無量光院堂宇の全景は視認することはできなかった。このことから、柳之御所とは異なり、伽羅御所と無量光院には、明確な視覚的な繋がりは認められなかった。

以上より、吾妻鏡^{註1)}には柳之御所及び伽羅御所ともに無量光院近傍に位置していたことが記されているものの、可視領域の観点からは柳之御所のみが視覚的な繋がりがあったことが明らかとなった。さらに、地形条件上は堀内部地区から無量光院堂宇の全景が視認可能であるが、実際には板塀で視界が遮られていたと考えられる（図17）。そのため建物内部に立ち入り、庇内などの板塀の上端よりも高い位置からのみ見ることが出来たと推定できる。特に客人を迎えて接待の儀式が行われた場として想定されている28SB2から視認可能であったことは、この建物の特別性を強調する演出として機能していた可能性を示唆している。その際、無量光院は山越阿弥陀図（図18）に描かれたような、土塁に囲われた姿として認識されたと推定できる。

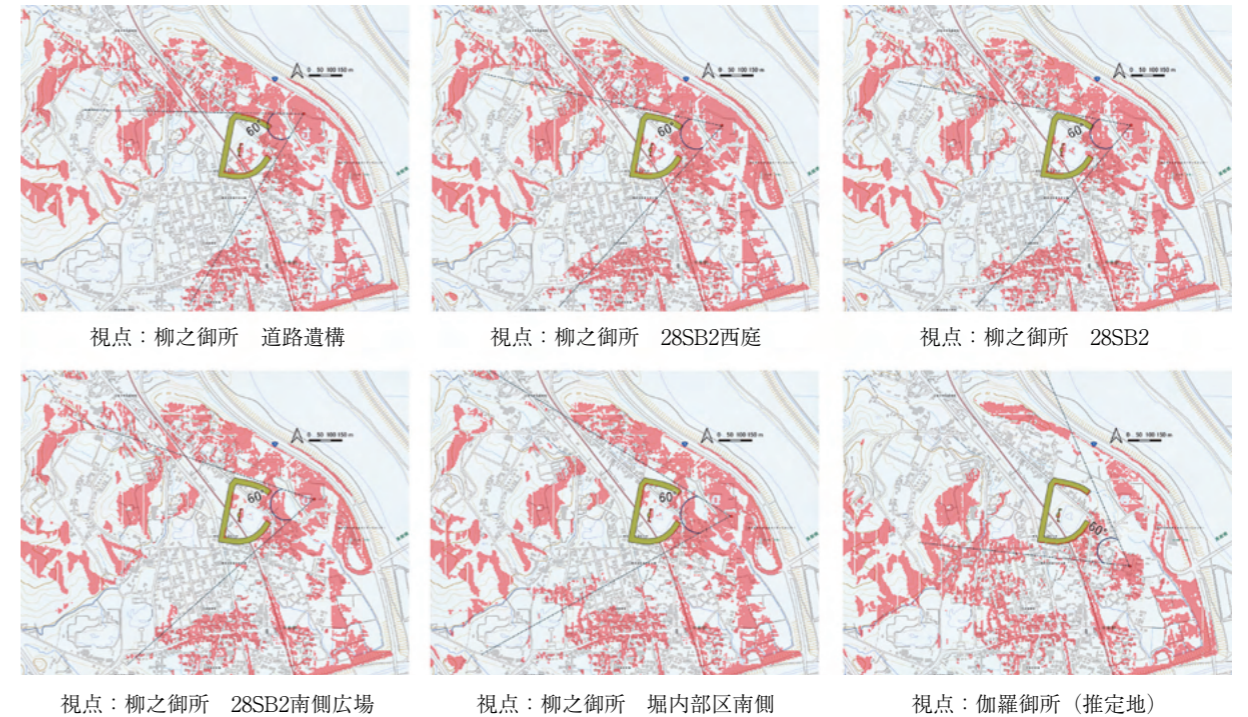


図15 標高35m土塁再現時の柳之御所・伽羅御所（推定値）の可視領域（凡例：■可視領域）

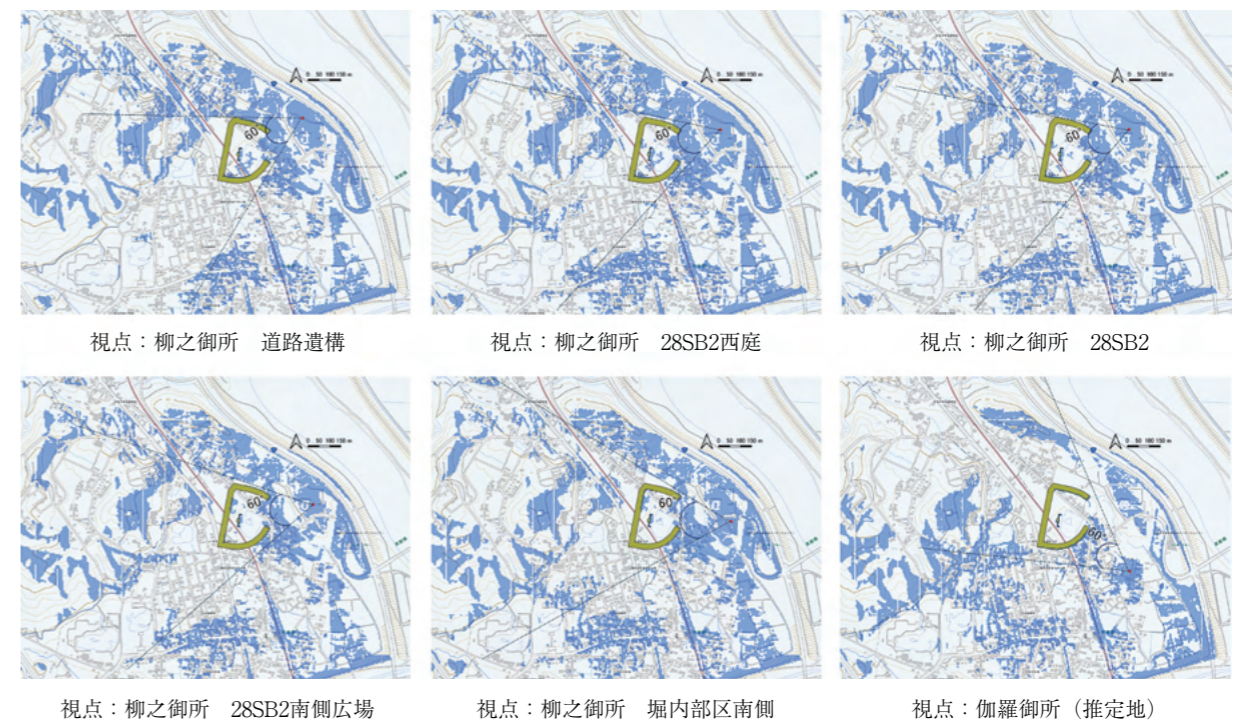


図16 標高32m土塁再現時の柳之御所・伽羅御所（推定値）の可視領域（凡例：■可視領域）

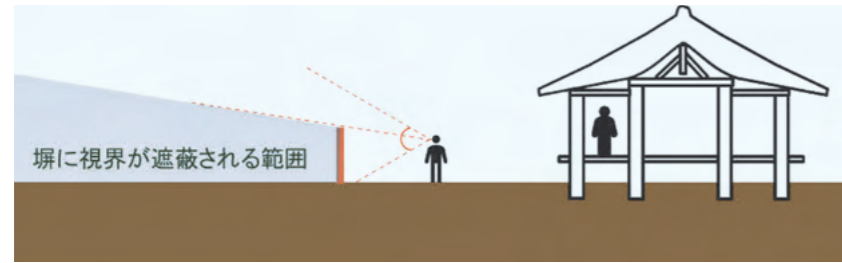


図17 板塀による視界の遮蔽状況（概念図）



右図：山越阿弥陀図
鎌倉時代・13世紀
京都国立博物館所蔵

図18 山越阿弥陀図

6. 無量光院と平泉の空間構成

前章までの結果を踏まえた無量光院と平泉の空間構成は次の三点に整理できる。

1) 境内の浄土景観の形成

境内では、土塁で限定された空間に浄土景観が作り出されていたと考えられる。中堂・中島・対岸ごとに見える範囲や景観が変化しており、視点場に応じて異なる景観体験が可能となるような空間構成であった可能性がある（図19）。これは先行研究でも指摘された「浄土世界を具現化した浄土庭園」としての特徴を、可視領域分析の観点からも追認する結果となった。

2) 無量光院と柳之御所の一体的な浄土空間

無量光院は境内で浄土空間が完結しているものではなく、隣接する柳之御所を此岸ととらえたとき、一体的な浄土空間として捉えることが出来る。柳之御所は政治拠点の場であると同時に、無量光院中堂全景が視認可能な限られた場所のひとつであった。このことは、柳之御所が単に隣接する施設ではなく、特定の場所（例えば建物の庇内など）からだけ浄土を望める、視覚的に関連づけられた特別な場所であった可能性を推測できる。

3) 柳之御所と平泉の象徴的景観構造

柳之御所は無量光院だけでなく、金色堂の可視領域内にも含まれていることが既往研究（磯野2009）より明らかになっている。政治拠点の場から無量光院や金色堂といった平泉を代表する浄土を表す建築や庭園が視覚的に関連付けられていたとすれば、柳之御所は平泉の中でも象徴的な位置づけを持つ空間であったと考察できる。

以上より、無量光院と柳之御所は互いに見え方を意識した配置関係の中で、「境内の中で完結する浄土」と、「柳之御所まで含めた地域規模の浄土」といった複層的な構造をもつ浄土空間を表現していた可能性がある（図20、図21）。つまり奥州藤原氏が目指した浄土世界を具現化しようとした試みは境内にとどまらず、その周辺地域を含めて形成されていたのではないかと考えられる。

本研究では、無量光院堂宇および土塁の再現データを用いた可視領域分析を行ったが、今後は柳之御所の建物や工作物などの標高データを加えた、より精緻な可視領域分析が求められる。また、平泉に存在する他の浄土表現建築・庭園を対象とした分析を進めることで、11世紀平泉の空間構成の全体像を包括的に捉える研究へと発展させる必要がある。



図19 境内の浄土景観（概念図）

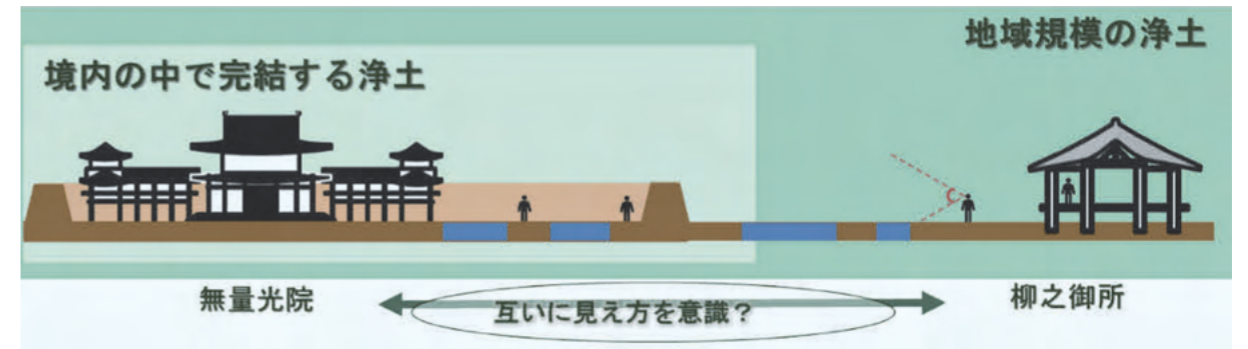


図20 柳之御所を含めた浄土景観（概念図）

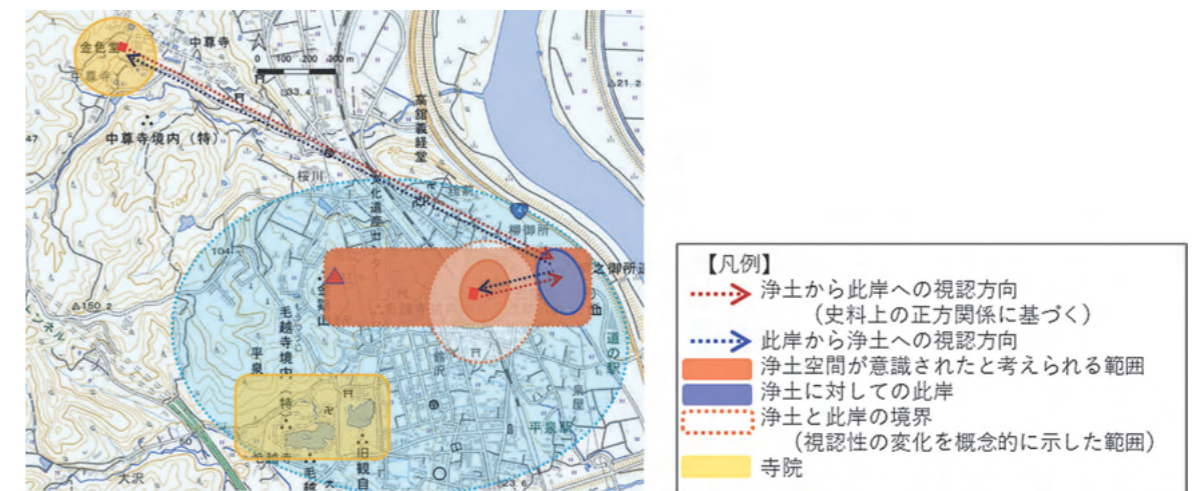


図21 可視領域分析からみた無量光院と周辺空間（概念整理図）

【謝辞】

無量光院及び柳之御所の3D点群データ測量及び点群データ処理にあたり、(株)日本インシークにご協力をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

【注釈】

- 1) 吾妻鏡文治五年九月寺塔已下注文日に「館事〔秀衡〕（略）並于無量光院之北。構宿館〔号平泉館〕西木戸有嫡子國衡家。（略）無量光院東門構一郭〔号伽羅御所〕秀衡常居所也。（略）」とあり、平泉館・伽羅御所が無量光院との位置関係で記されている。
- 2) 「見る一見られる関係」とは、景観工学において、ある場所における視線の多様な交差状態をいう。この視線の交差状態は場の雰囲気感を共有しているという一体感を支える視線の交錯である。この関係は人と人だけでなく、見る主体像を包括的に捉える研究へと発展させる必要がある。

(人)と視対象(地形・建築物・環境等)の間にも成立する。特に景観工学では、その距離・高さ・方向性といった条件によって、象徴性や認知的安心感(位置の同定や方向把握等)が形成されると考えられている。

3) 注視点を固定した場合、人の両眼の視野は頂角60度の円錐が標準的な視野範囲であることから、この「コーン60度説」を参考として視野範囲を設定した。

【参考文献】

- 1) 誉田慶信：平泉の仏教と景観、岩手大学平泉文化研究センター年報、2016
- 2) 山田安彦：方位読み解き事典、柏書房、2001.6.15
- 3) 入間田宣夫・豊見山和行：北の平泉、南の琉球 日本の中世、中央公論新社、2002.8.1
- 4) 誉田慶信：宗教から見た平泉、平泉文化研究年報第10号 岩手県教育委員会、2010.3
- 5) 誉田慶信：日本の歴史研究者から見た平泉の仏教文化—苑池の中の舞台と楽—、岩手大学平泉文化研究センター年報、2024.03
- 6) 前川佳代 平泉の苑池—都市平泉の多元性—、平泉文化研究年報第1号 岩手県教育委員会、pp.59-70 2001.3
- 7) 岡田健：平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究、平泉学研究年報 第5号 世界遺産平泉保存活用推進実行委員会、205.03
- 8) 篠原修編：景観用語事典 増補改訂第二版、彰国社、2021.02
- 9) 岩手県教育委員会：世界遺産 平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—、2013.03
- 10) 岩手県教育委員会編：柳之御所遺跡 第I期保存整備事業報告書、岩手県文化財調査報告書 第131集、2010.3
- 11) 内山久雄監修、佐々木葉著：景観とデザイン (改訂2版)、オーム社、2024.08
- 12) 磯野綾：平泉の市街地形成～周辺景観から見た中世平泉の市街地形成～、平泉文化研究年報第9号、2009.3

研究報告2 「柳之御所遺跡出土の中国浙江産磁器に関する研究」

張 睿 帆

はじめに

平泉遺跡群は12世紀代の海上シルクロードの最東端に位置し、古代国際間の交流を通じて膨大な量の海外産貿易品が搬入されたことから、日本国内のみならず世界的にも高い知名度を有していた。そのなかで、柳之御所遺跡は奥州藤原氏の中核的な政治拠点にあたり、出土遺物の量、質ともに平泉遺跡群の中でも屈指の規模を誇る。

一方、陶磁質品は無機物材料から成り、ほかの貿易品より、特に地中において非常に残りやすい化学性質をもつため、この柳之御所遺跡からも中国および朝鮮半島産の陶磁器が多数出土している。また、これらの海外産陶磁器の原産地については、朝鮮半島のものはほとんど高麗青磁ということがはっきりしたが、中国産陶磁器については未解明の点が多く、これまでの研究では、おおむね中国東南部に位置する浙江省および福建省、あるいは龍泉窯系や同安窯系といった大括りの原産地推定にとどまってきた。

そこで、本稿では中国側における近年以来の考古発掘や研究成果に基づいて、柳之御所遺跡から出土した12世紀代の中国南宋時代の陶磁器のうち、青磁をはじめとする浙江省で生産されたと考えられる資料を抽出し、その歴史的意義並びに流通経路について検討を行う。

1 貿易陶磁器の種類：青磁、白磁、青白磁

歴史上、日本で出土された海外産の陶磁器については、古代までほとんど中国や朝鮮半島産のものであり、中近世になると、ベトナム、タイなどの東南アジア、ひいてはヨーロッパ産のものも一定程度に確認できる。それらのものは、一般的には「貿易陶磁」と呼ばれる(亀井1986)。「貿易」の言葉が付いたが、学界での一般用語であるため、実は単的に貿易の商行為によって日本に進出したもののみならず、何らかの商行為以外の手段によって日本へ輸入したものを指し、それで「輸入陶磁」、「請来陶磁」、「渡来陶磁」などの呼び方もあった。欧米の場合は「export porcelain」、「import porcelain」、「trade porcelain」あるいは「trade ceramics」を称することが普通である。一方で、古代中国においては、陶磁質品が海外から輸入されることは非常にまれであったため、対外的に流通する陶磁器の多くは中国から海外へ輸出されたものであり、これらは一般に「外銷瓷」と称されている。

中世前半期までの日本においては、大陸由来の無釉陶器や施釉陶器も一定量確認されているが、貿易陶磁の中心を担っていたのは、やはり中国および朝鮮半島産の磁

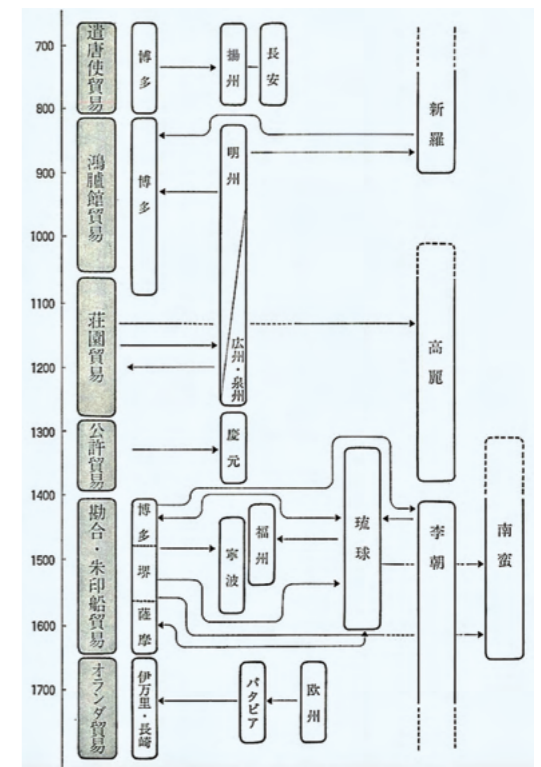


図1 日本貿易陶磁史モデル(亀井 1986より)

び福建省では、各自の考古発掘機関によって、省内の古窯跡調査が進められ、顕著な成果が得られている（図2）。本稿においても、これらの調査成果を参考する。しかしながら、浙江省と比較すると、福建省における古代陶磁生産の実態については、地形条件の複雑さや専門的研究人材の不足といった要因により、現在に至るまで不明瞭な点が少なくないため、その解明は今後の発掘調査の進展を待つしかない。

3 柳之御所遺跡出土の浙江産貿易陶磁器について

(1) いわゆる「同安窯系」青磁について

古代中世期における日本の遺跡から度々出土する劃花文青磁については、従来、福建省東南の沿海部に位置する同安窯を中心とする窯跡群に生産され、いわゆる「同安窯系青磁」と理解されることが多かったが、近年の中国側の調査により、南宋期の越州窯（図3）を北限として、浙江省東南部一帯においても広く生産されていたことが明らかとなった（馮2015）。また、類似する劃花文青磁は龍泉窯からも多数出土している（図4）。以上の点から、従来福建省産と考えられてきた劃花文青磁の多くは、浙江省で生産された可能性が高いと考えられる。とりわけ、青磁のうち発色の深い一部の製品については、福建省産よりも浙江省産である可能性が高いと推定される。これらの見解は、理化学的分析の成果によっても支持されている（會澤ほか2017）。



図3 越州窯開刀山窯出土青磁（馮 2015より）

実際には、福建省東南の沿海部に分布する古代磁器窯は、北方の龍泉窯をはじめとする浙江省諸窯および南方の潮州窯などの広東省諸窯という、双方の窯業技術や造形意匠の影響を受けて成立したと考えられている。一方、福建省西北部の山間部に位置する窯跡群は、「仙霞古道」を介して浙江省の龍泉窯および江西省の景德鎮窯と結ばれ、これら両窯から強い影響を受けていた。特に青白磁というものは、そもそも景德鎮窯の特産品であるため、地理的距離や交通条件を考慮すると、福建省山間部の窯跡群は青白磁の窯業技術を受容しやすい位置にあったと考える。つまり、福建省内の兩大窯業生産区の窯跡は、閩江をはじめとする河川交通によって相互に連絡していたとみられるものの、窯業技術や製品構成の面では、その性格に差異が認められる。

なお、柳之御所遺跡をはじめとする平泉遺跡群から出土した数多くの「白磁」については、近年の中国における発掘調査成果を踏ま

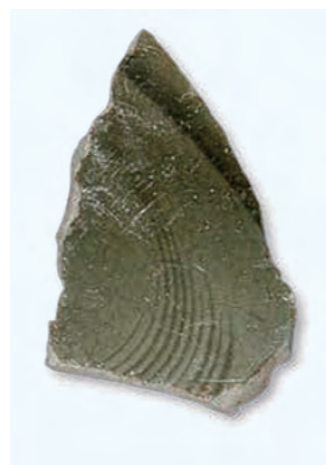


図4 龍泉窯杉樹連山窯出土青磁（馮 2015より）

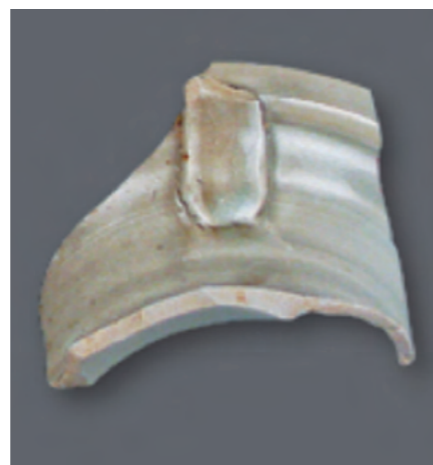


図5 福建省建窯出土青白磁^{註1}（馮 2016より）

えると、その多くを福建省産とみなす従来の理解は、概ね妥当であると評価できる。ただし、その具体的な生産地については、後述する柳之御所遺跡出土の雑色釉陶の検討を加えると、特に福建省西北部の山間に位置される窯跡群に注目して考察を進めたい（図5）。

(2) 柳之御所遺跡出土の雑色釉陶について

貿易陶磁の白磁の出土が日本ほかの消費遺跡より数多く以外に、緑釉、黄釉、褐釉などの中国産雑色釉陶の出土量が、平安京をはじめとする当時の主要な消費遺跡を上回る量で出土している点も、柳之御所遺跡の貿易陶磁出土特徴のもう一つである。この点については、これまで十分に注目されてこなかったものの、先行研究においては、福建省西北部に位置する武夷山窯が、その生産地候補として指摘されている（八重樫2023）。これに対し、本稿ではもう一つの生産地候補として、同じく福建省西北部の山間部に位置する南平の茶洋窯（図6）の可能性を提示する。武夷山窯および茶洋窯はいずれも雑色釉陶を大量に生産する点において、浙江省および福建省全体を通じてもきわめて珍しい存在である。したがって、柳之御所遺跡から出土した中国産舶載雑色釉陶の生産地を検討するうえで、両窯は中国から日本への雑色施釉陶器輸出の重要な候補として位置づけられる。



図6 茶洋窯開刀山窯出土緑釉陶器（馮 2016より）

4 浙江産磁器の平泉への運搬ルートについて

前文でも少し触れたように、9世紀末の「黄巢（こうそう）の乱」によって、遣唐使時代からの日中交流史上には最初の主要貿易港市である揚州が弱体化した。その代わりに、明州（慶元、寧波ともいう）をはじめとする中国東南沿海部の港市群は台頭し、東アジア間貿易の中心港として発展していった。本稿と関係する奥州藤原氏および平泉遺跡群の時代においても、この明州は東アジア間国際貿易の主要集散地の役割を担った。

浙江省東南部ひいては福建省西北部産の青磁、青白磁、雑色釉陶などの陶磁製品が平泉への運搬ルートについては、近年中

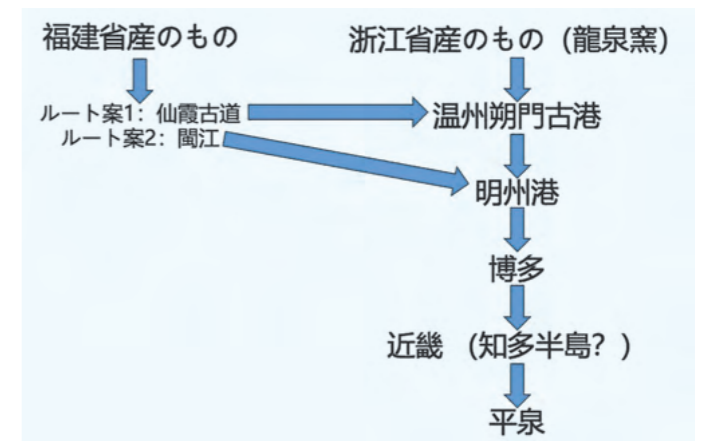


図7 中国産貿易陶磁の日本への運搬ルート案

国側の明州、温州などの港市遺跡の発掘調査の成果を加えると、以下の私案を提示したい（図7）。

温州朔門古港は明州の南、甌江の河口部に位置し、龍泉窯に最も近い港市であることから、龍泉窯青磁の輸出においては、同港が最初の中継地となっていたと考えられる。ただし、明州港からも南宋期以降の龍泉窯青磁が大量に出土しているほか、文献史料によれば、国際貿易を管轄する「市舶司」という機関が龍泉窯周辺に設置されていたのは明州のみであった。これらの点を踏まえると、龍泉窯の産品は、まず産地周辺の温州を経由し、その後明州に集積され、市舶司における税関検査などの手続きを経たうえで、日本へ輸出されたと考えられる。実際、この流通構造は、浙江省内の龍泉窯製品に限らず、遠隔地である福建省産の陶磁器にも共通していた可能性が高い。その根拠として、明州（寧波）の市舶司跡や永豊庫跡から出土した陶磁器の内容が、日本出土の貿易陶磁の様相およびその変遷ときわめてよく対応している点が挙げられる。さらに、明州周辺の多数の集落遺跡からは、中国内陸部ではあまり確認されない、遠隔地である福建省産の、質の劣る陶磁器が多量に出土していることが明らかになっている（呉ほか2023）。そのような出土品の性格については、航行の途上における寄港地において、船員の生活必需品を補給する目的で、一部の磁器が交易品として扱われた可能性が高いと考えられる。これは、海域を跨ぐ長距離航行とは異なり、沿岸航路などを利用した水運においては寄港地が多く存在するため、船舶があらかじめ多量の生活必需品を積載する必要がなかったためである。また、これらの福建省産陶磁器、特に同省西北部の山間部に位置する窯跡群の製品が明州に至る流通ルートについては、閩江などの水運に加え、前述した「仙霞古道」を利用した陸上交通を経由した可能性も十分に想定される（図8）。



図8 12世紀における東アジアの貿易陶磁情勢図

なお、柳之御所遺跡をはじめとする平泉遺跡群から貿易陶磁の出土状況は平安京など他の日本の消費遺跡との異なる点に着目すると、日本側の集散地である博多港から、奥州藤原氏の本拠地である平泉へと直接連なる航路が存在した可能性についても、検討の余地があるといえよう。

おわりに

本稿では、柳之御所遺跡から出土した浙江省産のものをはじめとする中国貿易陶磁器を対象として分析を行い、とりわけ青磁の多くが浙江省産である可能性が高いことを指摘する。また、平泉へ搬入された中国産陶磁器の原産地については、「仙霞古道」を介して結ばれる浙江省東南部から福建省西北部に至る地域を、その有力な候補地として提示した。

また、その流通経路については、これらの陶磁製品は生産地から集散地の明州に搬入し、その後明州にて外洋航海に適した大船に積み替えられながら、航行の途上において沿岸の寄港地で船員の生活必需品を補給するとともに、一部の磁器を交易品として販売しながら航行した可能性が高いと考えられる。

【註】

i これらのものは、日本の場合が常に「白磁」と見られる。

【参考文献】

日本語：
 會澤純雄ほか 2017 「ポータブル複合X線分析による白磁と青磁の胎土分析（その2）—中国および平泉出土資料の比較検討—」『平泉文化研究年報』第17号 岩手県教育委員会 pp.23-28
 赤松佳奈 2022 「青白磁の受容からみた京都と平泉」『岩手大学平泉文化研究センター年報』10 岩手大学平泉文化研究センター pp.51-72
 入間田宣夫 1995 「平泉柳之御所跡研究の現在」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集 国立歴史民俗博物館 pp.65-81
 岩手県教育委員会生涯学習文化財課 2019 『柳之御所遺跡—堀内部地区内容確認調査—』本文編 岩手県文化財調査報告書第155集 岩手県教育委員会
 小山富士夫 1977 「定窯々址の発見について」『小山富士夫著作集（上）』朝日新聞社 pp.385-428
 太宰府市教育委員会編 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
 徳留大輔 2013 「日本出土の中国産青磁の動向—龍泉窯系青磁を中心に—」『岩手大学平泉文化研究センター年報』1 岩手大学平泉文化研究センター pp.19-27
 徳留大輔ほか 2019 「ポータブル複合X線分析による中世前半期の中国産陶磁器の産地推定に関する研究—福建・浙江産陶磁器の研究を事例に—」『東洋陶磁』第48巻 東洋陶磁学会 pp.75-92
 羽柴直人 2009 「東北地方における12世紀の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』第29巻 日本貿易陶磁研究会
 三浦謙一 2019 「平泉出土の中国陶磁器の様相」『貿易陶磁器と東アジアの物流—平泉・博多・中国—』高志書院 pp.37-50
 木下尚子編 2009 『13～14世紀の琉球と福建：13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究：中国福建省を中心に』平成17～20年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書
 木田拓也 2022 「中尾万三による中国の越州窯の探索—青磁の源流を探った日本人—」『武蔵野美術大学研究紀要』第53号 武蔵野美術大学 pp.33-43
 八重樫忠郎 1996 「輸入陶磁器から見た柳之御所跡—内部地区と外部地区—」『中近世土器の基礎研究XI』日本中世土器研究会 pp.5-21
 八重樫忠郎 1997 「輸入陶磁器からみた平泉」『貿易陶磁研究』第17巻 日本貿易陶磁研究会
 八重樫忠郎 2000 「東日本における青磁の出現時期」『貿易陶磁研究』第20巻 日本貿易陶磁研究会
 八重樫忠郎 2023 「平泉遺跡群出土の貿易陶磁器研究の2000年以降の新研究と新発見について」『貿易陶磁研究』第43巻 日本貿易陶磁研究会 pp.20-27

中国語：

陳万里 1997 『陳万里陶瓷考古文集』 紫禁城出版社

馮小琦編 2015 『故宮博物院藏中国古代窯址標本 浙江（上、中、下）』 故宮出版社

馮小琦編 2016 『故宮博物院藏中国古代窯址標本 福建（上、中、下）』 故宮出版社

吳敬ほか 2023 「明州城遺址出土宋元瓷器与明州港市的考古学觀察」 『考古』 第2期 中国社会科学院考古研究所 pp.102-111

葉喆民 2011 『中国陶瓷史』 生活・読書・新知三聯書店

令和7年度「第6回平泉学フォーラム」実施報告

1 日 時 令和8年2月1日（日）10：00～16：00

2 場 所 水沢グランドホテル（奥州市）

3 主催・共催

（主催） 岩手県、岩手県教育委員会、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター
世界遺産平泉保存活用推進実行委員会

（共催） 一関市教育委員会、奥州市教育委員会、平泉町教育委員会

4 対 象 一般

5 実施方法 対面による開催

6 発表者

【基調講演】 『東南アジアの古代王都と寺院』

友田正彦氏（東京文化財研究所 副所長）

【共同研究に関する報告】

研究報告① 『柳之御所遺跡の考古学的研究』

県教育委員会（（公財）県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

研究報告② 『柳之御所遺跡出土の中国浙江産磁器に関する研究』

寧波大学 張 睿帆

研究報告③ 『無量光院の可視領域に基づく平泉空間構成の特徴』

千葉工業大学 磯野 綾

研究報告④ 『東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究』

岩手大学平泉文化研究センター 客員教授 佐藤嘉広

研究報告⑤ 『日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究』

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 長谷川伸大

岩手大学教育学部 講師 宮崎嵩啓

【調査成果の報告】

調査報告① 「骨寺村荘園遺跡の調査」 一関市教育委員会 菅原 孝明

調査報告② 「白鳥館跡の調査」 奥州市教育委員会 及川真紀

調査報告③ 「観自在王院跡の調査」 平泉町教育委員会 村上知穂・島原弘征・鈴木江利子

7 参加者数 170名

平泉学研究年報 第6号

令和8年3月25日

発行 世界遺産平泉保存活用推進実行委員会
(事務局：岩手県文化スポーツ部文化振興課)
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1
編集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課
印刷 株式会社 興版社
岩手県盛岡市中野1-4-14
TEL 019-624-3456